平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書の概要

都道府県名　北　海　道
推進地域名　美　唄　市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
研究テーマ：「工業高校の教育力を活かした、ものづくり学習の実践」
(1)　地域の小・中学生に工業高校の施設・設備・教育力を活用した、ものづくり学習を体験させる。
(2)　「ものづくり学習」を通して「ものづくり」への意欲・関心を高めさせるとともに、工業高校に学ぶ生徒には小・中学生を指導することにより生徒自身の学習意欲を高めさせる。
(3)　活動を通して、小・中学生や保護者はもとより地域の方々に工業高校への正しい理解を定着させる。

○連携推進地域協議会の活動状況
構　　成：美唄市教育委員会（参事、指導主事）
連携校（美唄市立中央小学校教頭、美唄市立東小学校教頭、美唄市立美唄中学校教頭、美唄市立東中学校教頭、美唄市立峰延中学校教頭）５名　本校（教頭、教務、総務、３学科代表）６名**計13名**

検討事項：①小学校、中学校、高等学校の教育内容等の理解と連携の在り方　②連携推進体制の在り方　③小学生を対象とした「ものづくり教室」の在り方と実施について　④中学生を対象とした「体験入学」の在り方と実施について　⑤中学校の教員を対象とした「学校説明会」実施について　⑥小・中学校の教員を対象とした「研修会」の実施について　⑦連携推進事業の成果と評価　⑧その他、本事業にかかる事項について

○推進校における活動の実施状況等
(1)　中学生を対象とした「体験入学」
(2)　中学校教員・父母を対象とした「学校説明会」
(3)　小学生を対象とした「学校探検」
(4)　小学生とその保護者を対象とした「親子ものづくり教室」

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策
(1)　中学生を対象とした「体験入学」では、中学３年生を対象に実施したが、進路選択の面からしても時期的に遅すぎた。２年生を対象にするなど、もっと低学年での実施を考え、早期に進路意識を持たせることが必要である。
(2)　中学校教員・父母を対象とした「学校説明会」では参加者が少なかった。更に中学校との連携を取りながら、実施時期・時間、内容等を決定する。
(3)　小学生を対象とした「学校探検」ではアンケート結果から実施時間の不足が伺えた。小学校と高等学校との校時時間の整合を図りながら実施時期と合わせて時間を決定する必要がある。
(4)　小学生とその保護者を対象とした「親子ものづくり教室」では、市販されている教材を使用した。組織的に独自の適当な教材開発が必要である。
(5)　連携推進事業の担当が専門教科（工業）主体となりがちであった。一部の先生方ではなく、事前準備含め学校全体で取り組んでいける体制作りが必要である。

○２年間の研究の全体的な評価
(1)　「ものづくり」の体験を通して、小学生に「つくる」喜びと工業高校への興味関心を喚起することができた。
(2)　工業高校と小・中学校との連携により、生徒と小・中学生との交流ができ、活き活きとした取組ができた。
(3)　生徒自身が指導者の経験をしたことで、指導する立場を理解し、学習に対して積極的に取り組む意欲と姿勢が出てきた。
(4)　小・中学校教員や父母の工業高校への理解が促進された。その結果、児童生徒への適切な進路指導の支援ができた。
(5)　推進事業を進める中で、小・中学校はもとより地域に信頼される学校作りを進めることができた。

○　リンク先
http://www.bibai-th.hokkaido-c.ed.jp/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　青　森　県
推進地域名　十 和 田 市

○　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

（１）研究のテーマ

「工業高校の生徒の指導による小・中学生のものづくり」

（２）特に重点を置いたところ

①教育課程上、高校では「課題研究」、小・中学校では「総合的学習の時間」で行う。
②小・中学生が「ものづくり」の楽しさを体験し、相互の理解を深めさせる。
③工業高校生自らが指導を行うことにより、学習意欲を向上させ、技能・技術の習熟に努め、大切な「ものづくり」を通して生き方を考えさせる。
④安全に作業を行う上での指導の在り方

○　連携推進地域協議会の活動状況

協議会を平成１３年度・１４年度に計４回実施した。

○　推進校における活動の実施状況など

平成１３年度　１０月から１４年１月にかけて「ものづくり教室」を実施

十和田市立東小学校	５・６年生	各々作成課題２種８回３２時間
十和田市立四和中学校	１・２・３年生	各々作成課題２種６回３６時間

平成１４年度　８月から１１月にかけて「ものづくり教室」を実施

十和田市立東小学校	５年生	作成課題２種６回１２時間
十和田市立東小学校	６年生	作成課題２種８回１６時間
十和田市立四和中学校	１・２・３年生	各々作成課題１種４回２４時間

○　今後の課題として残ったこと及びその対策方策

①授業内で生徒に「ものづくり」指導をさせるための、より十分な検討
②小・中学生の発達段階に応じた、指導可能な教材の蓄積
③施設・設備の整った「専用実習施設（例えば、ものづくりハウス）」が必要
④材料を揃えるための十分な予算が必要
⑤連携相手との十分な意志疎通の取れる関係をつくる。

○　２年間の研究の全体的評価

①　工業高校生は自ら「ものづくり」の指導を行うなかで、「ものづくり」の面白さや楽しさを知り、技能・技術の習熟や学習意欲を高めた。また、子供達をいたわり指導する中で、さらに心の成長を遂げた。

②　小・中学生は「ものづくり」の楽しさを体験する中で、新たな興味・関心・意欲を呼び起こし、自ら進んで意欲的に行動するようになった、また、自ら進んで他人と話をする経験をしたり、工業高等学校の実態に理解を深め、将来の進路についても考える機会を与えることができた。

○　リンク先

http://www.kamikita.asn.ed.jp/~th/monozukuri

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書の概要

都道府県名　　岩　手　県
推進地域名　　久　慈　市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

小・中学生が水産高校における水産・調理実習体験を通じて水産業への理解，ものづくりへの興味・関心を高めるとともに，水産高校生が小中学生を指導することによって学習意欲を高め，水産高校の活性化を図る。

○連携推進地域協議会の活動状況

第１回　　平成１３年　７月１２日（木）　　岩手県立久慈水産高等学校
第２回　　平成１３年１２月１２日（水）　　久慈市立三崎中学校
第３回　　平成１４年　６月２４日（月）　　久慈市立久喜小学校
第４回　　平成１５年　２月　４日（火）　　久慈市立小袖小学校

○推進校における活動の実施状況等

（１）実習船体験乗船
（２）久慈の特産品の調理実習（小女子クッキー）
（３）久慈の特産品の調理実習（小女子クッキー，むしパン）
（４）久慈の特産品の調理実習（鮭料理）
（５）１０年後の自分にメッセージを送る（夢缶づくり）
（６）１０年後の自分にメッセージを送る（夢缶づくり）
（７）１０年後の自分にメッセージを送る（夢缶づくり）
（８）１０年後の自分にメッセージを送る（夢缶づくり）
（９）ねり製品作り　　（１０）実習船体験乗船　　（１１）ウニの発生実験
（１２）小袖小学校　牛乳パックでハガキ作り
（１３）久慈の特産品の調理実習
（１４）久慈の特産品の調理実習

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

小・中学校の施設・設備が十分でないことから，多くの活動を高校で行わざるを得なかった。内容的には久慈水産高校の学習内容から，継続的なテーマが設定できず，単発的な活動とならざるを得なかった。

また，隣接学校とはいえ移動には貸し切りバスを使わざるを得ず，この点が交流の最大の課題となった。

○２年間の研究の全体的な評価

今回の事業を通して，できるだけ生徒を前面に出しての活動を行った。そうすることにより，水産高校生にとっては，自分たちが普段行っている実習を小・中学校の児童・生徒に指導することにより，自信をつけることができた。また事前準備・説明書（レシピ等）を作成し，自分たちの学習内容の確認も行うことができた。また，今回の事業に参加することにより，物事に対する積極的な姿勢が見られるようになった。

指導を受けた小・中学生にとっては，年齢的にも近い高校生に指導を受けることにより，水産高校が身近に感じられたようである。また，水産業に対する関心を持つきっかけやものを作ることの喜びを感じることができた。

○　リンク先

http://www2.iwate-ed.jp/kuf-h/index.html

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書の概要

都道府県名　宮城県
推進地域名　名取市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
（１）研究テーマ　　「食・農の心」の発見学習
（２）特に重点を置いたところ
① 児童・生徒が農業体験学習を通して，食の重要性を認識するとともに，生命・自然・環境などを大切にする心を培う。
② 農業体験学習を通して，地域の暮らしや農業の役割などを体得する。
③ 小学校・中学校・専門高校との相互の連携のもとで，児童・生徒が異年齢との交流体験や様々な体験を通して協調性・社会性や自立する精神を養う。
④ 小・中学生のみならず，教員を含めた交流体験により，専門高校への一層の理解を深める。
⑤ 学校農場を農業体験学習に活かし，地域との一層の連携教育をめざす。
⑥ 小・中学校に農業体験学習を導入した「総合的な学習の時間」の学習指導の展開実践例を示す。
⑦ 農業高校生が学習してきた成果を，小・中学生に教えることによって，農業高校生の一層の意欲・興味・関心を高めるとともに，農業教育並びに推進校の活性化をめざす。

○連携推進地域協議会の活動状況
推進協議会の構成員は，連携推進校長と研究主任，特に農業高校では教頭，教務部長，農場長，舎監長，各学科長，生徒（生徒会長，農業クラブ会長，寮長），助言者として宮城県教育委員会，名取市教育委員会担当者である。協議会の内容は，①連携推進校間の連絡調整。②推進校における児童生徒の学習活動の検討と実践。③学習上の安全対策等の検討，④研究の取りまとめと報告書作成である。地域協議会は，平成１３年度に３回，平成１４年度は３回実施した。さらに，推進校の研究主任による連絡会議も平成１３年度に２回，平成１４年度は４回実施して，小・中・高校の連携学習活動を推し進めた。

○推進校における活動の実施状況等
初年度は小・中学校教職員対象の農業研修や農業高校の施設設備見学，農高生による基礎的農業体験学習を実施した。平成１４年度は下記のような農業体験学習と指導法の研究を実践した。
①栽培・飼育の体験学習（イネ・メロン・トマト・イチゴ・草花・リンゴ栽培，小動物・家畜飼育）
②農産物の加工等に関する体験学習（うどんづくり・アイスクリームづくり）
③生活に潤いをもたらす体験学習（藍染め・草木染め）
④農業を支える技術の基礎的体験学習（バイオテクノロジー・遺伝資源を題材とした植物栽培）
⑤地域の環境や食文化に関する体験学習（ガーデニング・花壇づくり・ハマボウフウ栽培と食体験）

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策
主な課題として，児童生徒の発達段階に応じた学習内容の検討，栽培サイクルが理解できる体験学習の在り方の検討，児童生徒の輸送・安全面への配慮，多くの教職員が交流・研修できる体制作りの検討などがあげられる。
その対応策としては，①体験学習のねらいを明確化し，全体の見通しをもって計画を立てる。②地域実態を把握し，実情に合った学習内容を検討する。③専門高校から発信された教育情報を収集する。④学習内容は児童生徒の発達過程や実態を考慮する。⑤各教科における学習指導の内容との関連を図り，指導方法を工夫する。⑥児童生徒の意欲や興味・関心を高める内容を工夫する。⑦児童生徒の健康管理や安全確保に十分配慮する。特に学習中における事故防止に努め，生徒輸送など交通手段に留意する。⑧学習時間を十分に確保する。また，事前の綿密な打ち合わせや調整時間も必要である。⑨農業高校をはじめ，保護者や地域の関係機関と密接な連携を行う。⑩教育課程への位置づけと学習評価を工夫する。

○２年間の研究の全体的な評価
推進校の成果として，小学生は農業や食料に目を向け，いのちの大切さを学び，自然環境への関心が高まった。中学生は農業高校への興味・関心が高まり進路決定の参考になった。農高生は学習成果を伝えることにより，知識や技術の深化及び農業を学ぶ意義や誇りを深めることができた。さらに，教員間の交流により農業高校への理解が一層促された。
また，２年間の研究により明らかになった課題とその対応方策を提案でき，これを参考に，今後の専門高校と小・中学校との連携が一層推進されるものと考える。

○　リンク先
http://www.miyanou.myswan.ne.jp

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　秋　田　県
推進地域名　　男　鹿　市

○研究のテーマ及び研究において特に重点を置いたところ

(1) 研究のテーマ

「地域や学校の実態に応じた，水産高校と小・中学校との望ましい連携の在り方はどうあればよいか。」

(2) 特に重点を置いたところ

体験活動等を取り入れた水産高校での活動に小・中学生が触れることにより，専門高校の実習内容や学習内容を知る契機とし，併せて地域への理解を深めさせる。

また，専門高校生が小・中学生を指導することにより，生徒自身の学習内容を深め，学習意欲を向上させる。

○連携推進地域協議会の活動状況

平成１３年度に１回，平成１４年度に２回，計３回協議会を実施し，事業の実施計画，連携の在り方，推進体制の在り方，活動の在り方，事業の成果の評価の在り方，事業の成果と改善点，継続連携の在り方等について協議した。

○推進校における活動の実施状況等

連携推進地域協議会での協議を踏まえ，専門高校における校内推進委員会で年度毎の活動内容を企画し，連携小・中学校担当者と協議の上，次のような活動を実施した。

(1) 大型実習船「船川丸」による体験乗船
(2) 結索(ロープの結び方)体験とミニチュアパネル作り
(3) カヌー体験乗船
(4) ワカメ養殖の種糸巻き体験
(5) 大型船用エンジンの運転体験
(6) 機械工作による文鎮製作体験
(7) 消失模型鋳造法による文鎮製作体験
(8) 食品製造体験(茹で小豆缶詰)
(9) 食品製造体験(鯖水煮缶詰)
(10) 気象衛星ひまわり受信体験
(11) パソコンによる年賀状作り体験

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

(1) 効果的に活動を実施するための事前指導と安全教育の充実
(2) 教育課程に位置づけ，計画的な活動にするための工夫
(3) より長期的，計画的な体験学習を実施するための工夫
(4) その他，日課表の調整や評価方法の研究

○二年間の研究の全体的な評価

専門高校(水産高校)で取り扱う水産・海洋に関する幅広い内容で，実施機会を予想以上に多く持つことができた。本事業の当初の目標達成のため，三校の連携をさらに緊密にして，今後も事業を継続していきたい。

○　リンク先

http://www6.ocn.ne.jp/~kaiyou/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書の概要

都道府県名　　福島県
推進地域名　　会津坂下町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

農業体験学習を通した小・中・専門高校間の交流と、地域の一員としての在り方生き方に関する研究

① 各組織の設置

o連携推進地域協議会の元に連携推進実行委員会を組織し，更に各推進校に推進委員会を設置し、研究する。

② 推進校全校で取り組める、継続的な取り組みの計画と事業の弾力的な実施。

○連携推進地域協議会の活動状況

① 平成１３年度

o連携推進地域協議会第１回会議、第１回連携推進実行委員会への参加(町教育長、推進校各校長)
第2･3回連携推進実行委員会への参加(会津農林高校校長)、連携推進地域協議会及び実行委員会

② 平成１４年年度

o連携推進地域協議会第１回会議、第１・２・３回連携推進実行委員会への参加(会津農林高校校長)
連携推進地域協議会及び実行委員会

○推進校における活動の実施状況等

「平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書」

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

（１）指導教師の適切な関わり

十分な活動の深まり、成果の獲得のためには指導教師の適切な関わりが必要である。

（２）場の設定

円滑な事業を実施するためには、綿密に計画・立案しなければならない。また、休業日の利用も検討の余地がある。

（３）職員の意識高揚

各連携校の学校を挙げての協力体制づくりのため、本事業に対する認識を全職員に徹底する必要がある。

（４）研究成果の活用

実践内容や方法のさらなる研究のため、実践成果や課題の分析及び資料の収集と蓄積を図り、それらを指導者間で共有化できるよう努めなければならない。

（５）保護者・地域との連携

より大きな効果を得るためには、児童・生徒の交流のみに止まらず、保護者や地域住民との連携も視野に入れた取り組みにより、双方の交流や学校理解を進める必要がある。

○２年間の研究の全体的な評価

２年間の継続実践研究により、小・中・高間の交流が図られ、互いの学校理解につながっただけでなく、実践を通して変容した児童・生徒が多かったことから、本事業の教育効果は大きかったといえる。

なお、各推進校からは以下のような点について評価された。

o異年齢での活動により、体験的活動の幅が広がり、特に感性を高める豊かな体験活動ができた。
o「ものづくり」の活動により、達成感や成就感・学習意欲を高めることができた。
o意図的・計画的な活動の実践と意図的な指導の相乗効果により、関心意欲の高揚につながった。
o事業の実践で交流を深めたことにより、専門高校や農業に対するイメージが向上したと同時に、生徒の進路学習の参考にできた。
o学習の基礎・基本の定着、プレゼンテーション能力の育成に役立った。
o自分に自信がつき、何事にも積極的に取り組むようになった。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　茨　城　県
推進地域名　下　館　市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

研究テーマは，「工業高校生の指導による小・中学生へのものづくり体験学習等に関する教育の推進及び工業高校の活性化を図る研究」と設定とした。

特に研究において重点を置いたところは，ものづくり体験学習を通して，小・中学生のものづくりへの意欲・関心を高め，さらにその保護者及び地域の人達に工業高校への正しい理解を促すことである。また，こうしたものづくり等の体験学習を工業高校生が指導することよって，工業高校生自身の学習意欲・関心を高めるとともに、異年齢の小・中学生との交流によって、責任感や使命感を養い，進路意識の高揚や将来の職業人として自覚を図らせ，工業高校の活性化を図ることである。

○　連携推進地域協議会の活動状況

協議会では，活動のねらい，実施内容・方法，計画，評価，研究成果のまとめ方等の基本的な事項について検討した。また，推進校４校で構成する小委員会（担当者会議）を設置し，協議会での基本的な事項に沿って，推進事業の具体的な活動の細部について検討した。なお，年度内に協議会、小委員会とも２回開催した。

○　推進校における活動の実施状況等

工業高校各学科（4 学科）でものづくり体験学習のテーマを提示し，小・中学生が希望の活動を選択する。その後，小・中学校を会場として指導する高校生が事前説明会を行った。そして後日，工業高校を会場とした，高校生の指導によるものづくり体験学習を実施した。

小学生は，ブックエンドの製作，コンピュータ内蔵のブロック組立部品を活用したロボットの製作，建築CAD による木造平屋住宅の設計，IC を用いた電子オルゴールの製作を行った。また，中学生は，文鎮の製作，コンピュータ内蔵のブロック組立部品を活用したロボットの制御，手作り立体地図の製作・測量体験，IC を用いた電子オルゴールの製作を行った。

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

今後の課題としては，連携先や近隣の小・中学校から，今後事業を発展させ継続して欲しいとの要望がある。この事業で得た成果を踏まえ，より発展させて多くの学校との連携に取組むために，活動内容や実施方法，多くの学校との効果的な連携の仕方等について予算措置を含めて対応を検討する必要がある。

その対応としては，参加を希望する小・中学校を含めるなど組織編制の充実を図り，柔軟な受入体制を整える必要がある。さらに，完全学校週５日制に配慮した事業の創意工夫や夏季休業等の長期休業中における小・中学生の参加を推進していくこと，学校行事等（文化祭等）を利用して活動できる範囲を拡大することなどの工夫が必要である。

○　2年間の研究の全体的な評価

工業高校生が小・中学生に「ものづくり」を指導することは，教えることの難しさや，大切さを知ることができ，生徒自身の学習意欲を刺激することができた。また，生徒間の交流も深まり，協力し合う喜びや自らの行動に責任をもつことなど，責任感や使命感等を感じることができ，生徒自身の人間的な成長が伺えた。

小・中学校の児童生徒や教員，保護者より「ものづくり」について良好な評価が得られ，「ものづくり」に対する興味・関心を高めることができた。また，現在連携していない小・中学校からも，事業に参加したい旨の希望が届いており，このことは，保護者を含めた推進地域において工業高校での「ものづくり」が受け入れられつつあり，その結果，今後の事業の継続を望む声が高まったと考えられる。

○　**リンク先**

http://www.shimodate-th.ed.jp/ken.htm

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　群馬県

推進地域名　　高崎市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

当地域の小・中・高等学校では、ボランティア活動、地域人材の活用など地域に密着した実践を積み重ねてきた。これまでの成果を基盤として「『生きる力』の育成を目指した専門高校と小・中学校との連携の在り方について」を研究テーマとして、各学校間で柔軟で緊密な連携を進め、地域に開かれた魅力ある学校づくりを通して「生きる力」の育成を目指す。

また実践活動において、できるだけ児童・生徒が関わりを持てるよう配慮する。

○連携推進地域協議会の活動状況

平成13年9月7日,平成14年6月21日に協議会を開催し下記の事項について協議した。

①本事業の概要について　②連携の在り方について　③活動の方針とねらい
④計画の概要　⑤実践事例の報告　⑥活動の評価と今後の課題

○推進校における活動の実施状況等

以下のような活動を実施した。

①高校生による部活指導　②ものづくり教室　③パソコンレスキュー隊
④実習・課題研究の見学　⑤工業祭の見学　⑥花の寄贈
⑦地域行事へ参加　⑧授業協力　⑦作品展示会の開催

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

①事業が円滑に進められるような連携校間の時間割の工夫
②工業高校の進路まで含めて理解できるような活動の実施
③より多くの児童生徒が参加できるような配慮
④児童生徒の学年に応じたテーマや活動内容の選定

○２年間の研究の全体的な評価

従来ほとんど交流のなかった校種間での連携ということで、とまどう面も多かったが、事業を進めるなかで連携校への理解が深まるだけでなく、異なる組織や手法に接したり、議論することにより視野が広がった。また地域に開かれた学校の重要性が再認識され、今回の事業以外でも生徒の作品展の開催や、定時制においても小中学校と交流を行うなど活動に広がりが出てきている。

高校生は小中学生を指導することにより、工業高校生としての知識や技能が深化し自覚も高まった。また、活動を行う中で自主性が芽生え、ひいては「生きる力」の育成にもなった。さらに、地域住民とのかかわりのなかで社会性を高め、習得した技術を通して社会に貢献することによって技術の本質を確認することができた。

小中学生も行事に参加することにより、工業高校に対する理解が進み、興味も増した。また、ものづくりの楽しさや完成の喜びも体験でき、これから他の作品も製作したいという感想もあった。

○　リンク先

http://www.takako-hs.gsn.ed.jp

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　埼玉県
推進地域名　新座市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

①研究テーマ

「２１世紀を担う子どもたちにたくましく「生きる力」を育成するための、専門高校と小・中学校の望ましい連携・協力の在り方について」

②研究において特に重点を置いたところ

２１世紀を展望するとき、子どもたち一人一人が人間として調和を図りつつ、心身ともに健全で主体的に生きていくこと求められている。このような中で、小・中学生においては、産業体験やものづくりなどの体験学習を通じて、豊かな心を育むとともに、産業やものづくりなどへの意欲、関心等を高めることが重要である。また、専門高校生においては、小・中学生への体験活動を指導すること等により、異年齢との交流の機会をとおして、生徒自身の学習意欲を高め、進路意識を高揚させることができる。さらに、専門高校と小・中学校との望ましい連携による調査研究は、小・中学　生や保護者などの専門高校への理解を促し、その活性化を図ることが期待される。

これらのことから、本研究においては、２１世紀を担う子どもたちにたくましく「生きる力」を育成するために、専門高校と小・中学校がどのように連携・協力をすることが望ましいかについて、特に重点を置いて事業を実施した。

○連携推進地域協議会の活動状況等

①活動状況

「連携推進地域協議会」の開催（第１回：平成１３年１０月１９日（金））（第２回：平成１４年５月２２日（水））（第３回：平成１４年１１月７日（木））

②主な検討事項等

ア 推進体制の在り方　　イ 学校における研究組織の在り方　　ウ 推進校間の連携の在り方
エ 連携して実施するにふさわしい活動の在り方　　オ 本事業の成果の評価及び課題

○推進校における活動の実施状況等

13年度	７月２４日（水）「小学生と高校生の交流事業」の打合せ ９月１４日（金）第１回「５校連絡会」の開催 １０月１９日（金）第１回「連携推進地域協議会」の開催 １１月２２日（木）「小学生と高校生の交流事業」の実施（栄小学校） １１月２８日（水）「小学生と高校生の交流事業」の実施（片山小学校） １１月２８日（水）総合的な学習の時間における「上級学校調べ」の実施（第三中学校） １月１９日（土）「卒業作品発表展」の見学（第三中学校） １月２３日（水）授業参観及び施設設備の見学（池田小学校） 「小学生と高校生の交流事業」の実施（栄小学校） ３月１３日（水）第２回「５校連絡会」の開催：中間まとめ
14年度	５月　７日（火）第３回「５校連絡会」の開催 ５月２２日（水）第２回「連携推進地域協議会」の開催 ６月１０日（月）全国連絡協議会への参加 ６月２６日（水）高校生を小学校に派遣して授業補助の実施（片山小学校） １０月１５日（火）体験授業（調理実習）及び施設設備の見学（池田小学校） １０月１７日（木）高校生を小学校に派遣して授業補助の実施（栄小学校） １１月　４日（月）「第三中学校区ふれあいフェスティバル」への参加 １１月２９日（火）体験授業（調理実習）及び施設設備の見学（第三中学校） １１月　７日（木）第３回「連携推進地域協議会」の開催 体験授業（図工の作品制作）及び施設設備の見学（片山小学校） １１月１３日（水）公開授業（１５日（金）にも実施） １１月２６日（火）高校生を小学校に派遣して授業補助の実施（池田小学校） １月１８日（土）「卒業作品発表展」の見学（１９日（日にも実施） ３月１４日（金）高校生を小学校に派遣して学校行事補助の実施（池田小学校）

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

①小・中学生においては、産業体験やものづくりなどの体験学習を通じて、豊かな心を育むことができると考えるが、そのために産業やものづくりなどへの意欲、関心等を高める方策の一つとして、今後とも専門高校の教育力を活用した研究を進めていくことが大切である。

②専門高校生においては、小・中学生への体験活動を指導することなどにより、異年齢との交流の機会をとおして、生徒自身の学習意欲を高め、進路意識を高揚させることができることから、今後ともより一層工夫してこのような機会を数多く確保していきたい。

③専門高校と小・中学校との望ましい連携は、小・中学生や保護者などの専門高校への理解を促し、その活性化を図ることが期待されることから、公開授業等の実施など地域や保護者も巻き込んだ研究を進めていきたい。

④このような連携推進事業を通じて、児童や生徒がどのように変容したかについても引き続き研究をしていく必要があると考える。

○２年間の研究の全体的な評価

小・中学生においては、産業体験やものづくりなどの体験学習を通じて、豊かな心を育むとともに、産業やものづくりなどへの意欲、関心等を高めることが重要であると考えるところであるが、このことについては、一部にはその成果を確認できるものの、やや不十分であったと考える。今後も継続的に、児童や生徒の変容などについて研究をしていく必要がある。

また、専門高校生においては、小・中学生への体験活動を指導することによる異年齢との交流の機会をとおして、生徒自身の学習意欲を高め、進路意識を高揚させることができた。

さらに、公開授業等の実施などをとおして、地域や保護者も巻き込んだ専門高校と小・中学校との望ましい連携については、小・中学生や保護者などの専門高校への理解を促し、その活性化を僅かではあるが図ることができた。

○　リンク先

http://www.nsg-h.com

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　千葉県
推進地域名　　茂原市・長柄町

１　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

（１）研究テーマ

「総合的な学習の時間」の展開を中心とした千葉県立茂原農業高等学校と長柄町立日吉小学校と長柄町立長柄中学校との連携推進事業

（２）テーマ設定の理由

①小・中学生に農業実習などを体験学習させることによって，生命・自然を大切にし，人を思いやる心などを育成する。また、農業やものづくりなどへ意欲，関心を高める。
②農業高校の生徒が，小・中学生を指導することによって，生徒自身の学習意欲を高める。
③小・中学生や保護者などの農業高校への理解を促す。
④農業高校の活性化を図る。
⑤農業高校と地域の結びつきを深め、郷土愛あふれる児童・生徒を育成する。

２　連携推進地域協議会の活動状況等

平成１３年　７月３１日（火）　長柄町立日吉小学校との協議会
平成１３年　８月１６日（木）　長柄町立長柄中学校との協議会
平成１３年１０月２９日（月）　専門高校と小・中学校との連携推進地域協議会
平成１４年　８月　５日（月）　専門高校と小・中学校との連携推進地域協議会

３　推進校における活動の実施状況等

平成１３年１１月１３日（火）　長柄町立日吉小学校との連携事業
学校演習林での野外活動、演習林内での植樹、地域古墳群への植樹を実施する。

平成１３年１１月２９日（木）　長柄町立長柄中学校との連携事業
農業高校における「課題研究」の学習成果を、中学校へ出向き中学生、保護者に紹介する。

平成１４年　９月２６日（木）　長柄町立日吉小学校との連携事業
ミニ動物園の開催、乳牛の搾乳体験、動物のスケッチ、家畜とのふれあいを体験する。

平成１４年　９月２６日（木）　長柄町立長柄中学校との連携事業
農業高校で実施されている「課題研究」の授業を中学生と一緒に展開する。

４　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

① 実施にあたっては、次年度の計画を早めに立案し、教科の中に明確に位置づける。年度が替わってからの企画であると、カリキュラムの関係でゆとりのある実施が困難である。
② 校外に出ることも多いため、児童生徒の安全面や輸送等で経費がかかる。経費の削減に努め、継続的な実施を目指したい。

５　研究の全体的な評価

① 異年齢間の交流をとおして児童・生徒が生き生きと活動し、高校生が指導者の役割を担い学習意欲の向上が図られた。また、行事の立案、企画運営や資料の準備を通じて自主性や実行力を養うことができた。
② 動植物の栽培飼育などを体験することで、自然の大切さ、生命の大切さを実感するとともに、人を思いやる心の育成ができた。
③ 総合的な学習の時間を深化、発展させることで、身の回りの自然環境、世界的な環境問題への幅広い関心を養うことができた。
④ 農業高校における体験学習や地域との連携・交流等通して児童・生徒および保護者の農業高校への理解が深まった。

平成13・14年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　　報告書の概要

都道府県名　　東　京　都
推進地域名　　葛　飾　区

1　研究テーマ及び研究において重点を置いたところ

研究テーマ：　小中学校からの専門高校の理解と専門高校の活性化

重点を置いたところ：　ものづくり体験を通して、小中学生に創造の喜び、理論への関心を育むとともに、共同作業を通して思いやりの心を伸張することと高校生に小中学生を指導させることで専門高校の活性化を図ること。

2　連携推進地域協議会の活動状況

東京都教育委員会、葛飾区教育委員会、東京都立本所工業高等学校、葛飾区立金町中学校、葛飾区立原田小学校から連携推進地域協議会委員を選出し、その一部の委員をもって実務者会議を構成し、高校を会場として、それぞれの会を年３回開催した。

3　推進校における活動の実施状況等

- パーソナルコンピュータの製作：　高校生が指導し、小中学生がパソコンを組み立て、ソフトウェアをインストールした。
- 出前授業：　高校教員と外部講師が中学校に出向き、授業を行った。

4　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

(1)　２年間の事業では、教育課程上の位置づけが厳しかった。中高校間では、連携校間で中学生を高校への優先入学、高校の単位の修得などを行える環境の整備が必要である。

(2)　我が国の工業技術教育は、小学校の図画工作、中学校の技術、大学の工学部と技術教育の連続性が断絶している。わずかに、工業高校がその間を繋ぐ役割を担っているが、家庭科のように全ての高校生が学習するものではない。今回の連携事業を通して、教員が相互に授業の実態を理解し、指導法の交流が可能となり、高校教員による中学校技術科教員の研修会を開催した。

5　２年間の研究の全体的な評価

本事業を通して、教員の交流が深まり、教員が相互に校種の違い、生徒の違いや指導法の違いを理解したことが最大の成果である。この結果、例えば高校教員が小学校教員の教材開発や指導法の支援をすることが可能となった。

第二の成果は、高校生が中学生や小学生を指導することで、相互に好影響を与えることが実感できた。実際には、事故時の補償など解決しなければならない課題もあるが、土曜日に高校を会場として小中学生とその保護者を対象とした活動が可能であると思われる。

全体として、お互いに身近な存在でありながら、その具体的内容を十分理解することが無かったが、本事業を通して相互に学校の教育内容を理解することができ、有益な事業であった。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　神奈川県

推進地域名　開 成 町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

研究テーマとして「地域に根ざした学校間連携の活性化」を設定し、下記の事項について、特に重点を置き研究・実践した。

１　専門高校と小・中学校及び地域間の連携・推進体制のあり方の研究

２　高校生、小・中学生三者に有効・有益な連携・融合事業の研究と実践

○連携推進地域協議会の活動状況

各校の校長等により構成される連携推進地域協議会で基本的事項を協議し、２ヶ月に１回開かれた実務担当者会議で内容の具体化を図った。

○推進校における活動の実施状況等

１　「交流授業」

吉田島農林高校普通科１年の「農業基礎」（２単位）と開成小学校２年の「生活科」の時間を利用して、年間を通して合同で作物栽培を行った。

２　「吉田島農林高校ＷＨＡＴ」

夏季休業中、小・中学校、開成町教育委員会に呼びかけ、「林業体験」、「果物の収穫とおいしい果実の見分け方」、「豆腐づくり」の３行事を内容とする共催事業「吉田島農林高校ＷＨＡＴ」を開催した。

３　「公共施設の花壇整備」

高校生が小・中学生を指導し、花の苗を育て、プランターに植え替え、町の公共施設に配置した。

４　「卒業式会場の花飾り」

高校生が小・中学生を指導し、花の苗を育て、小・中学校の卒業式の会場準備に出向き、花飾りの指導と助言を行った。

○今後の課題として残ったこと及びその対応策

１　今後の課題

深まった高等学校、小・中学校、幼稚園の教職員の相互理解及び緒についた連携推進事業を今後どのように発展させていくかが、大きな課題である。

２　対応策

今後も協力体制を維持、推進し、児童生徒を主人公とする共催事業を実施するために、開成町教育委員会が事務局となり、「開成町幼稚園、小・中学校、高等学校体験連携事業協議会」を設置することとした。

○２年間の研究の全体的な評価

本事業の実施を契機に、幼稚園、小・中学校、高等学校の連携が一段と進んだ。また、高校生が中心となった活動は、高校生の新たな可能性を切り開き、専門高校生としての自覚を高めた。さまざまな行事は、保護者を含めた地域の方々の指示と共感を得て、専門高校に対する理解を深めることとなった。

平成 13・14 年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書の概要

都道府県名　　新潟県

推進地域名　　上越市

○　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

児童、生徒が育てる楽しさや収穫の喜び、ものを作るおもしろさを知る体験を通じて一層農業等への関心を高める。また、高校生がその中心になることで、学習意欲を高め、自立心等を養成することとした。

○　連携推進地域協議会の活動状況等

小中高推進関係者、農業改良普及センターを中心に構成した。

○　推進校における活動の実施状況等

担当生徒は連携の目的に合わせて、サツマイモ４００m^2、ダイコン５００m^{2}の栽培に取り組めた。収穫体験の場でも小・中学生をよく導き、目的が達せられた。収穫直後に畑で試食をすること、持ち帰って利用してもらうことについても十分な収穫量が確保できた。

実践した栽培分野については初期の目的が達成できたが、農業高校が持っている多くの分野に及ぶ内容で、多くの児童生徒が参加できるように実施することについては、本校の今年の事情で未達成に終わった。

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

（１）　活動の実施に関わって、内容や日時の調整などそれぞれの事情を十分考慮した無理のない計画とするのは難しい。連携校同士の関係を深め、長期的に改善していくことが必要である。

（２）　栽培については、小中高生が交流する前提でその全期間に渡って体験・観察が可能な状態となるよう条件設定が求められる。連携校の近くに畑を設定し、高校生がしばしば訪れることができることが理想である。

○　２年間の研究の全体的な評価

（１）　小・中学生は体験学習を通して「育てる楽しさと収穫の喜び」、「生命、自然を大切にする心」、「農業に関する意欲・関心」を高めたと思われる。

（２）　高校生は体験学習を通して、小・中学生を指導することにより、生徒自身の学習意欲を高めるとともに、年長者としての自覚を持ち対応することができるようになった。

（３）　農業高校の特色や教育内容を地域に紹介しながら、生徒自身の自立心、チャレンジ精神、リーダーシップを育てることができた。

附記　１年目の成果を踏まえ、２年目には学校全体の連携に進めようと計画したが、学校の大規模改修と本校所有する大型バスの故障等から、小・中学生が本校の設備を使用できなかったことが残念だった。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　富山県

推進地域名　大沢野町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

市販のキットを単に組み立てさせるのではなく，これにセンサという知覚を組み込み，いくつかの手作業を織り交ぜた「動く物」を製作させる。その動作原理を自然界にある身近な物理現象並びに人間の五感とを対比させ，年齢や学習項目に合わせて平易に解説する。その中でものづくりの楽しさを体験させ，併せて，小・中学生の理解度や作業状況などを検証する。

○連携推進地域協議会の活動状況等

全国連絡協議会をうけて７月初旬にに連携推進地域協議会（ものづくり協議会）を開催した。これまで本校で実施してきた「ものづくり教室」について，活動計画について説明し，意見を交換した。各校の行事日程を調整し「ものづくり教室」の開催日を決定し，町内の小中学校へ出向き活動の内容説明を行い，参加生徒を募集した。

○推進校における活動の実施状況等

７月初旬より基板作成などの準備に取りかかった。各校からの希望者を調整し，大沢野工業高等学校において，「ものづくり教室」を実施した。

・平成１３年度　８月２日（木）　午前，午後の２回開催

・平成１４年度　８月６日（火），７日（水）の２日間開催

「ものづくり教室」当日は参加者に理解してもらおうと懸命に説明する姿が見られた。製作指導することによって，教えることの喜びを体験できた。また，素朴な質問に対して受け答えすることによって，理解してもらうことの難しさも体験できたと思う。

○２年間の研究の全体的な評価

参加した児童・生徒の多くは参加して「楽しかった」と答えており，大多数は次回もぜひ参加したいと答えている。中には，毎年に本校で実施している「ものづくり教室」に参加する生徒もおり，ものづくりへの興味・関心を高めていくためにも児童・生徒の要望に応えられる継続的な活動が望まれていると感ずる。

ロボットを組み立てることは小学生にも容易であったが，センサの働きを考え動作原理を理解することは小学生には難しかったようであった。高校生がこれまで製作してきた多くのロボット（相撲ロボットなど），作業内容や課題に違いを持たせた指導が必要であると思われる。

また，小学校によっては参加希望者が多く調整に苦労されたと聞いている。できるだけ多くの希望に答えられるように，２日あるいは，それ以上の開催日を設定していきたい。

「ものづくり教室」の様子は新聞やテレビに大きく取り上げられた。指導にあたった高校生たちにとって，日頃，工業高校において学習していることを地域の人に知ってもらうこと，自分たちの成果を認識，賞賛してもらうことは，大きな自信につながるものと思われる。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　石川県
推進地域名　　能都町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

海を教育資源とし、高校生が授業や部活動を通じて得たウインドサーフィンの知識や技術を地域の小・中学校に指導することで自信を付けさせ、生徒自身の学習意欲を高めるとともに、この事業をとおして自然や生命を大切にする心や忍耐力、さらには　郷土愛を育み、地域の活性化に寄与する。

○連携推進地域協議会の活動状況

年２回の協議会の開催及び実習のサポートや発表会での激励

○推進校における活動の実施状況等

１　指導人数　石川県立能都北辰高等学校　海洋科１・２・３年生１４名

２　活動概要　　３　連携先の概要

（１）セッテング・セイルアップ指導…実習　　能都町立能都中学校　　３年６名
（２）セイルアップ・５ステップ指導…実習　　能都町立鵜川中学校１・３年６名
（３）アビーム走行・進路変更指導　…実習　　能都町立瑞穂中学校　　０名
（４）方向転換・生徒の発表　　…実習　　能都町立宇出津小学校６年生７名

４　教育課程上の位置づけ等　：　総合実習・課題研究

５　成果

（１）高校生が小・中学生を指導することにより仲間意識が芽生えるとともに、教える難しさを知り、自分の技術アップにつながった。
（２）地域の活性化に貢献し、生徒のイメージアップになった。

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

（１）各学校の日程を調整し、夏休み初めに活動を開始したが、各学校の行事の都合により、生徒が連続して参加できなかった。今後、海洋スポーツ等の授業中に学校単位で活動したい。
（２）地域のスポーツクラブにウインドサーフィンクラブを立ち上げる予定であったが、地域の責任者が確保できないため中止された。今後、一般の人にも指導し地域ぐるみで取り組み、より地域の活性化を図りたい。

○２年間の研究の全体的な評価

高校生の若いエネルギーが地域の活性化に大いに貢献し、学校に対する理解や協力・支援体制が強化された。また、保護者の積極的な参加もあり学校との連携も密になり、スムーズな協力が得られるようになった。

指導した生徒は、「小・中学生とのふれあい」「社会に役立つ」喜びを体験でき、責任感、自信、規範意識等が身につくなど意義のある活動であった。

○　リンク先

http://www.ishikawa-c.ed.jp/~hoksnh/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　福井県

推進地域名　小浜市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

①研究テーマ「地域に開かれた学校づくり　～小・中学生と共に学ぶ交流学習～」

②特に重点を置いたところ

若狭東高等学校は、普通科、農業科、工業科を有する総合制の高等学校であり、この特色を生かして地域に開かれた学校づくりを模索してきた。本研究では、地域の専門高校と小・中学校との連携を通して、高校生と小・中学生との交流や体験学習等を行い、児童・生徒の地域産業に対する関心を高めるとともに、共に学び合うことによってお互いの学習意欲を高め、専門高校と小・中学校の双方がともに活性化するような連携推進の在り方に重点を置いた。

○連携推進地域協議会の活動状況

・第１回協議会　平成１３年９月　７日(ＪＡ若狭本店)

・第２回協議会　平成１４年１月３０日(ＪＡ若狭本店)

・第３回協議会　平成１５年２月２４日(ＪＡ若狭本店)

○推進校における活動の実施状況等

【工業科】①パソコン操作補助　②ロボットの操作　③電気の基礎
④電池の制作・実験　⑤表札作り

【農業科】①葉ボタンの播種、移植、定植　②イチゴ苗の定植　③イチゴジャム作り
④測量機器の操作　⑤ミニ門松作り　⑥卵の実験　⑦ハーブの利用
⑧豆腐作り

【その他】①高校見学　②中学３年生の専門学科体験　③お茶会

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

①専門高校、小･中学校相互の教育内容などの相互理解によるプログラムの拡大

②教育課程上の幅広い位置づけの再検討

③連携学習の内容に系統性を持たせる工夫

④児童・生徒の移動手段と安全面への配慮

⑤農業(栽培など)での、実施時期の再検討

⑥地域の他の小･中学校からの要望による連携校拡大の検討

○２年間の研究の全体的な評価

【高　校　側】①学習意欲が高まり、教科学習の定着がはかられた。
②教える方法を工夫するようになった。
③小･中学生を教えることにより、精神面での自信が芽生えた。

【小中学校側】①生命への関心が深まった。
②農業(栽培、加工)への理解が深まった。
③ものづくりへの関心が高まった。
④異年齢交流が楽しくできた。

○　リンク先

http:/www.hokuriku.ne.jp/whigasi/

平成１３･１４年度専門高校と小･中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　山梨県

推進地域名　韮崎市、双葉町、白州町

○研究テーマ及び研究において特に重点をおいたところ

［**研究のテーマ**］

専門高校と小・中学校との連携を推進し、環境教育・情報教育・ものづくりなどの体験学習を通じて、生命・自然を大切にする心をはぐくむ。

［**重点を置いたところ**］

（１）専門高校生が、自ら学んだ学習内容を主体的に教えることにより、社会性を身につけるとともに、専門高校における学習内容の深化と学習意欲の向上を図ること。

（２）小・中学生が体験的学習を通して科学的・技術的分野に興味をもち、学ぶことへの意欲・関心を高め、生命・自然を大切にする心をはぐくむこと。

○連携推進地域協議会の活動状況

協議会には外部の有識者３名を加え、活動のねらいや実施計画、評価、報告のまとめ方等の基本的な事項について、２年間に４回開催し協議した。

また、地域の教育事務所と推進校３校で構成する実行委員会を設置し、２年間で７回の協議を行った。ここでは協議会での基本的な方針に沿って、推進事業の具体的な活動の細部について検討した。

○推進校における活動の実施状況等

平成１３年度		平成１４年度	
13.10.4	環境教育（双葉西小学校）	14.6.14,21	情報教育　（双葉西小学校）
13.10.11	環境教育（双葉西小学校）	14. 9.24	ものづくり（白州中学校）
13.11.1	環境教育（韮崎工業高校）	14.10.17	ものづくり（双葉西小学校
13.11.5	情報教育（白州中学校）	14.10.31	環境教育　（韮崎工業高校）
13.11.27	情報教育（双葉西小学校）	14.11.7,14	環境教育　（双葉西小学校）
13.11.29	情報教育（双葉西小学校）	14.11.15	情報教育　（白州中学校）

・

○ 2年間の研究の全体的な評価

（１）１年目の課題であった①ものづくりを実施すること、②高校生の参加数を増やす中で交流を深めること、③授業内容が重複しないように学校間の連携を十分図ること、などについて、２年目には解決することができた。

（２）専門高校生が、主体的に教えることで児童・生徒の興味・関心を引くことができた。また、体験的な取り組みは学習意欲を高めることにつながった。

（３）児童・生徒の身の回りの大気・水質を測定することにより、環境問題を身近なこととしてとらえることができるようになり、科学的なことに興味や関心をもてるようになった。

（４）３つの事業とも実施時期が特定の時期に集中しすぎたために、推進校相互に負担が増した。異校種間の連携を十分に図ることができなかった。

（５）遠距離交流のため徒歩等による移動が困難であり、参加生徒数に制限を受けることとなったが、それなりに工夫することにより、遠距離による連携の可能性を探ることができた。

○　**リンク先**

「山梨県下工業高校共同ホームページ」　http://www.kai.ed.jp/7tec_hs/

「山梨県立韮崎工業高等学校」　http://www.kai.ed.jp/nirasakith/

「やさしい環境のページ」　http://www.kai.ed.jp/kankyou/kankyou/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　岐阜県
推進地域名　　高山市・宮村

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
(1) 研究テーマ　「農業高校の学習内容を生かした小・中学校との連携の推進」
(2) 研究の重点　・専門高校として提供できる連携推進事業の内容・方法について
　　・教育課程上の位置付けについて

○連携推進地域協議会の活動状況
(1) 期日及び会場：①H13.9.19、②H14.5.16、③H15.1.30　会場：斐太農林高校
(2) 出席者：１３名（宮村教委教育長、各学校長、小中学校ＰＴＡ会長、関係教職員）
(3) 内容　①学校の教育内容、連携推進体制の在り方、体験学習の在り方
　　②活動実施計画、実施結果の成果と課題、連携推進事業の成果の評価

○推進校における活動の実施状況等
(1) 宮小学校全児童「花壇やプランターへの草花の定植」２回実施(場所：宮小学校)
　高校生が指導に出向き、全校児童・保護者・住民が参加した全村的な取組になった。
(2) 宮小学校１・２年生農業体験学習「動物ふれあい体験他」（場所：斐太農林高校）
　高校の学校農場において馬、牛、豚、鶏、ウサギ等の動物とふれあい、果樹園を見学しブドウ収穫を体験した。実際に動植物にふれることができ大いに喜んだ。
(3) 宮中学校２年生体験学習（場所：斐太農林高校）
　「ラーメンづくり」「バイテク体験」「測量体験」から１人２種類を選択して体験した。

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策
(1) 宮小学校：一方的に高校に援助をお願いすることが多かったが、「総合的な学習の時間」等をさらに活用し、双方向の学習活動を取り入れるなど発展させたい。
(2) 宮中学校：年に一回しか協働体験ができなかったが、高校の研究発表会等に参加したり、産業教育施設・設備を活用した学習を行う等、活動の機会を増やしたい。
(3) 斐太農林高校：①高校から小・中学校に出かける場合は交通手段や予算に制約があり多人数の派遣は困難であるが、村立小・中学校はスクールバスが使用できる。
　②今回は科目「総合実習」に位置付けたが、「総合的な学習の時間」や「特別活動」での取組も可能である。

○２年間の研究の全体的な評価
(1) 宮小学校：①高校の援助で学校全体で取り組んだ「全校親子プランタ花運動」は地域を巻き込んで様々な成果があった。②高校での動物とのふれあいやブドウの収穫は、消費のみで生産活動の実体験が少ない児童にとって貴重な体験であった。
(2) 宮中学校：①協働体験により農業高校に対する学校理解を深めることができた。
　②興味ある体験メニューで楽しく前向きに交流できた。特に、複数の内容を選択できたことにより主体的に取り組めた。③高校生の思いやりのある丁寧な指導の姿から、中学生は多くのことを学ぶことができた。
(3) 斐太農林高校：①高校生に自信が高まり、専門学習に対する意欲が一層向上した。
　②専門知識や技術を生かした活動により、専門を学ぶことの必要性を認識できた。
　③生徒は普段以上に生き生きと活動し、評価の観点を見直すことができた。

○　リンク先
県立斐太農林高等学校　http://school.gifu-net.ed.jp/hida-ahs/
大野郡宮村立宮中学校　http://www8.ocn.ne.jp/~miya-chu/
大野郡宮村立宮小学校　http://www.miya.org/miyashou/

平成１３年・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　静 岡 県
推進地域名　天 竜 市

１　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

研究テーマ「異年齢交流による森林環境教育」

（１）光明小学校におけるねらい

①　森林に関する学習を通して、自ら課題を持ち、課題に向かって進んで学び、解決しようとする資質や能力を育てるとともに、ふるさと天竜を愛する気持ちを育てる。

②　異年齢交流や友達との交流を通して、人間関係の広がりと思いやりの心の育成を図るとともに、自分や友達のよさ、個性の発見の場とする。

（２）光明中学校におけるねらい

①　専門的な知識や技能をもつ高校生と共に活動することを通じて、ものづくりへの興味・関心の向上と学習内容の深化・発展を図る。

②　高校文化祭の体験教室に参加し、地元専門高校の理解を深める。

（３）天竜林業高校におけるねらい

①　自ら考え、自ら行動できる「生きる力」の育成を図る。

②　森林、林業への興味関心を深化させ、学習意欲の向上を図る。

③　地域社会と連携した学習活動を展開し、保護者や地域の方々に本校の理解を促す。

２　連携推進地域協議会の活動状況

平成１３年度

（１）８月　７日（火）推進校天竜林業高校の概要説明と校内見学、全国連絡協議会説明
研究テーマ、目的、活動計画の検討等

（２）２月２１日（木）活動報告と反省、来年度への取組方針検討等

平成１４年度

（１）４月２２日（月）研究目的、活動計画の検討　評価方法の検討等

（２）２月１３日（木）活動報告と反省、来年度以降、継続的な取組を検討等

推進校における活動の実施状況等

	実　施　状　況	
	＜小学校＞	＜中学校＞
14年度	４月１１日　コミュニケーション作り	
	４月２５日　森林講座	
	５月　９日　木を植えよう！	
	６月２０日　楽器を作ろう！	楽器を作ろう！NO.1
	６月２７日　竹とんぼを大空に飛ばそう	楽器を作ろう！NO.2
	９月１９日　樹木博士に挑戦！	
	１０月　３日　間伐・枝打ち体験　１０月１０日	間伐・枝打ち体験
	１１月　２日　高校文化祭の子供の森（体験教室）	
	１１月２１日　丸木で作る森の動物たち	樹木博士に挑戦！
	月１回、木曜日５・６時間目の実施	

３　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

（１）中学校と専門高校との連携事業を教育課程上に位置づけることは難しい。

（２）高校において日頃の専門学習の内容が削減される。
無理がない程度に回数を減らすとともに、各専門学習の内容の検討をする。また、小中学校にも準備等の分担をする。

（３）地域との連携を深める（高校の施設だけでは展開が困難）

４　２年間の研究の全体的な評価

新学習指導要領の目的の一つである、自ら考え自ら行動する「生きる力」や相手を思いやる心の育成には大きな成果が表れたと推察する。小中学校においては、専門高校への興味関心が深まり、進路指導にも役立った。来年度以降も、天竜市の援助で小中高の連携を継続する予定である。特に、天竜林業高校は生産流通科を「森林科学科」に科名変更をするとともに、学校設定科目「森林インストラクター」を設置し、連携事業の充実を計画している。それに先駆けて、昨年末に自然体験活動リーダーの指導者養成団体にも認定され、森林都市宣言の天竜市にふさわしい活動を模索中である。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　愛　知　県

推進地域名　佐　織　町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

・研究テーマ

「児童･生徒たちが創造する喜びやものづくりの楽しさを体験できる内容及び展開方法を探り、ものづくり教育の推進及び推進体制に関する研究」

・特に重点を置いたところ

ものづくりを通して専門高校生と小･中学生との交流を深め、専門高校生自身が体得したものづくりの楽しさを､小･中学生とその保護者も交えて体験させることができる内容及び実施方法、その推進体制について重点を置いて研究した。

○連携推進地域協議会の活動状況

平成１３年度第１回連携推進地域協議会　平成１３年９月　４日に開催

平成１３年度第２回連携推進地域協議会　平成１４年２月１４日に開催

平成１４年度第１回連携推進地域協議会　平成１４年６月１２日に開催

平成１４年度第２回連携推進地域協議会　平成１５年２月１３日に開催

○推進校における活動の実施状況等

・小学校における活動状況

専門高校生が小学校へ出向き、科目「課題研究」等で作った作品を展示説明し、児童は、その操作や簡単な「ものづくり」を高校生の指導のもとに体験した。また、工業高校の施設・設備を使い、体験製作も行った。（ロボット、電気自動車、電気機関車、ミニ新幹線、電動車椅子、模型、手作りルアー、草木染め、ペーパークラフト、コースター）

・中学校における活動状況

専門高校生が中学校へ出向き、学年全員を対象に統一のテーマで実施をした。内容はコンピュータによる３次元図形処理ソフトを活用したペーパーモデルの筆立てを製作した。また、中学生は１０人程度のグループに分かれ、それぞれのテーマで工業高校の施設･設備を使ったものづくりを体験した。（旋盤による文鎮、鋳造による文鎮、ロボット製作、インテリアランプ、住宅模型、ハンカチの絞り染め）

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

ものづくりを主体とした体験活動として各学年の発達段階に応じた内容であること､継続するためには教育課程に位置付けていくことが必要である。また、専門高校での体験は普段と異なった環境で効果も大きいが、全員対象で実施する場合、時間的にも施設・設備の点からも制約がある。年間指導計画を立てる上で、小・中学校と連携を密にした児童・生徒の期待に応えられる実施計画を立てていきたいと考えている。

○２年間の研究の全体的な評価

小学生は、参加・体験型のイベント的な交流活動を中心に取り組んだ。児童は、五感を使って体験することができ、その目的は十分に達成できたのではないかと考える。中学生は、本年度実施した専門高校で行うものづくり体験が、日ごろと違った環境での体験も含め、ものづくりの楽しさや喜びを感じとっていた。また、地域の方々の専門高校への理解を深めるために、小学生の保護者に積極的に働きかけた結果、親子で行うものづくり体験を実施することができ、内容においてもたいへん好評であった。

さらに、教える側の高校生は、普段やっていることであっても教えることの難しさ、小・中学生やその保護者とのコミュニケーションの取り方など多くのことを学び、大きな自信につながった。

連携推進地域協議会においては、小・中学校をはじめ地域の委員より、児童・生徒にやる気と夢を与える事業であったことや高校生との触れ合いの中で、ごく自然なあいさつができるようになったという意見など交流活動に深まりが感じられた。また、これらの活動を継続していくことが大切であるという意見もあった。

○　リンク先

http://www.saori-th.aichi-c.ed.jp/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業 報告書の概要

都道府県名　三重県
推進地域名　上野市・阿山町

○　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
研究テーマ：「農業体験学習プログラムの作成とその実施を通した「生きる力」の育成」
特に重点を置いたところ:
今回の研究事業においては、次の二点に重点をおいて実施した。
(1) 農業に関する体験学習を通して、小・中学生が、生命や自然を大切にする心を育み、農業に対する興味・関心を高め、農業及び農業高校の良き理解者としてのすそ野を広げるとともに、「生きる力」の育成を図ること。
(2) 農業高校生が、小・中学生の農業体験学習を指導することで、生徒自身の学習意欲を高め、自信と誇りを持たせるとともに、異年齢者との交流を通してコミュニケーション能力の向上を図ること。

○　連携推進地域協議会の活動状況
(1) 第１回協議会（日時：平成13年10月1日（月）　場所：上野農業高等学校）
(2) 第２回協議会（日時：平成14年2月18日（月）　場所：上野農業高等学校）
(3) 第３回協議会（日時：平成15年2月10日（月）　場所：上野農業高等学校）

○　推進校における活動の実施状況等
平成13年度の実践を生かし、農業高校の生徒が農業体験学習に一層主体的に関わることができる「農業体験学習プログラム」を、生徒が中心となって企画した。プログラム冊子についても、見やすいものにすることに心がけ、また、内容についても、農業高校で実施する体験学習と、出前授業で実施する体験学習とを区別し、明記した。
平成13年度に引き続き連携する小・中学校は、農業体験学習を各学校の教育課程に位置づけるとともに、年度当初の計画により、農業体験学習を実施した。

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策等
（今後の課題）
・　施設・設備が充実している農業高校で農業体験学習が実施できるように、児童・生徒を運ぶためのバス等の交通手段を確保するための予算を措置する。
・　農業体験学習の教育課程上への位置づけを確立する。
・　すべての農業高校生が、小・中学生を指導できるようにする必要がある。
・　高校と小・中学校が、事前の準備及び打ち合わせを一層密にする必要がある。
（対応方策）
・　小・中学生が農業高校まで来る交通手段・経費の確保をする。
・　年度当初にテーマを決め、計画を立て、単発のイベントで終わらないように年間で継続して取り組む。
・　子どもたちにとって魅力的な題材や教材の研究を行うとともに教育内容の充実を図る。
・　綿密な事前打ち合わせと事前指導、事後指導を充実する。

○　２年間の研究の全体的な評価
・　小・中学生は、農業体験学習を経験することで、生命や自然を大切にする心を育み、農業に対する興味・関心を高めることができた。また、農業体験学習プログラムを各小・中学校の卒業生である農業高校生が指導することで、先輩の活躍する姿から多くのことを学んだ。
・　農業高校生は、小・中学生の農業体験学習を指導することで、自分自身の学習意欲が高まり、自信と誇りを持つことができた。また、異年齢者との交流をとおしてコミュニケーション能力の向上も図れた。

○　リンク先
・　三重県立上野農業高等学校　http://www.mie-c.ed.jp/aueno/index.html
・　上野市立中瀬小学校　http://www.ueno-mie.ed.jp/nakase-e/
・　上野市立友生小学校　http://www.ueno-mie.ed.jp/tomono-e/
・　上野市立桃青中学校　http://www.ueno-mie.ed.jp/tose-j/
・　上野市立成和中学校　http://www.ueno-mie.ed.jp/seiwa-j/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　滋賀県
推進地域名　長浜市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
・小・中学生が農業体験を通して、生命や自然を大切にする心を育むとともに、農業への理解や興味関心を高める方法を検討する。
・高校生が小・中学生を教えることにより、自らが学び農業学習への意欲を高めることができるような指導方法を検討する。
・地域との連携により、専門高校の活性化を図る方法を検討する。

○連携推進地域協議会の活動状況等
年間２回の連携推進地域協議会と推進のための連携担当者会議を随時実施した。

○推進校における活動の実施状況等
①小学校との連携
・「農業ふれあいスクール事業」の実施（年間 4 回× 2 年間）
高等学校における草花・野菜・畜産・果樹の栽培体験を通した異年齢間の農業体験交流活動。高校生が専門学習で学んだ内容を小学生に教える。

②中学校との連携
・中学校スクール農園における栽培援助・助言交流（平成 14 年度）
高等学校における類型学習において自ら育てた野菜苗等を中学生へリレー栽培（配布提供）し、交流を深めた。中学校のスクール農園の栽培管理に高校生が来校して指導・交流した。（白菜など秋野菜の定植と根菜類の播種）
・中学校の調べ学習におけるインターネット交流「ネットで回答」（2 年間）
中学校における総合的な学習の時間において、調べ学習を進める中で疑問点や質問などが出てきたときに、インターネット（電子メール）を利用して交流した。中学生が農業高校へ質問を送信し、高校生が学習内容をもとに回答した。
・高等学校における「体験実験・実習」交流活動（平成 14 年度）
中学生が総合的な学習の時間に収穫した米・サツマイモ・大豆を用いて実験実習を高校生と交流しながら体験した。高校の農場実験実習施設において稲の組織培養や大豆の成分分析、サツマイモの加工実習などの後、農場見学と質疑応答を行った。

○今後の課題として残ったことおよびその対応方策等
事業自体は大変意義深く有効な活動ができたが、実施細部においてより綿密な連携が必要である。（実施日程の調整や天候等の対応、設備・施設の整備等）

○２年間の研究の全体的な評価
全体的に小中学生にとって、高校生との農業体験を通して興味関心が高まり、高校生も自信と学習意欲の向上につながった。

○　リンク先

長浜農業高等学校ホームページ	http://www10.ocn.ne.jp/~ n.noukou/
長浜市立北中学校	http://www.biwa.ne.jp/~kita-jhs/
長浜市立長浜南小学校	http://www.biwa.ne.jp/~go373syo/

平成13・14年度専門高校と小・中学校との連携推進事業実施報告の概要

都道府県名　　京都府

推進地域名　園部町・亀岡市

1　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

(1)　研究テーマ

「農業専門高校の特色を生かした小・中学校との連携のあり方」

(2)　研究において特に重点を置いたところ

①　小学生が農業体験学習を通して、植物を慈しみ生命や自然を大切にする心をはぐくむとともに、農業に対する関心や植物を育てることへの意欲を高める。

②　専門高校生が小中学生の農業体験を指導することによる相互の異年齢交流を図り、小学生の実体験の広がりと農業高校生の専門学習の深化と定着を図る。

2　連携推進地域協議会の活動状況等

(1)　構成

府教育庁所管課長及び関係指導主事、並びに推進校及び連携校の各校校長

(2)　活動状況

①　第１回地域連絡協議会（平成 13 年６月９日）

・　本府連携推進事業実施要項と地域連絡会規約、平成 13 年度の実施計画

②　第２回地域連絡協議会（平成 14 年１月 31 日）

・　平成 13 年度総括と平成 14 年度実施計画

③　第３回地域連絡協議会（平成 14 年７月２日）

・　全国協議会方向及び平成 14 年度実施計画

④　第４回地域連絡協議会（平成 15 年１月 28 日）

・　実践報告並びに事業総括

3　推進校における活動の実施状況等

(1)　農芸高校主催のジャンボカボチャの栽培コンテストを実施した。

(2)　小学生のサツマイモ栽培を農芸高校の圃場で実施し高校生が指導した。

(3)　本校農場での実習や草花の提供など小・中学校の栽培系クラブへの活動支援を行った。

4　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

本事業を進める中で、小・中学生には農業の楽しさやよろこびを感じてもらう取組みを中心とし、専門高校の生徒には徹底した準備を中心とした指導を進めることにより、本事業の目的が達成され、地域の信頼と期待に応えられる学校づくりが推進できる。

また、教職員は日常と異なる学習場面を設定し、指導できることや、小・中学校の教員との連携ができることは重要なことであり、今後さらに充実した取組を計画的に進めていく必要性がある。

5　２年間の研究の全体的な評価

本事業を通して、小・中学生を指導する高校生は教えることの難しさを感じるとともに、人に感謝されることで学習意欲が増しより深く学ぶ姿勢が見えた。また、指導するための事前準備の必要性を実感し、自主的・積極的な行動が見られた。

日頃の学習内容を自らが指導することにより、農業の専門学習や学校に対する自信と誇りを育成することができた。

○　リンク先

http://www1.kyoto-be.ne.jp/nougei-hs/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　大阪府
推進地域名　茨木市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

１　茨木市立西中学校の生徒が、茨木工業高等学校の支援によって「ものづくり」を体験し、「ものづくり」への意欲・関心を高める。

２　「ものづくり」の体験活動を茨木工業高等学校の生徒が指導することで、生徒自身の自覚を促すとともに、専門知識・技術の習得への学習意欲を高める。

３　中学生や保護者などの茨木工業高等学校への理解を促し、専門高校としての活性化を図る。

○連携推進地域協議会の活動状況等

１　平成１３年度第１回協議会　平成１３年９月２８日（金）大阪府立茨木工業高等学校
２　平成１３年度第２回協議会　平成１４年1月１７日（木）茨木市立西中学校
３　平成１４年度第１回協議会　平成１４年５月１６日（木）茨木市立西中学校
４　平成１４年度第２回協議会　平成１５年２月　７日（金）茨木市立西中学校

○推進校における活動の成果と課題

１　平成１３年１２月１８日（火）午後　大阪府立茨木工業高等学校において「楽しいものづくり体験」を実施した。参加者３２名。
（１）フラワースタンドの製作（機械工学科）
（２）電子オルゴールの製作（電子工業科）
（３）七宝焼の製作（環境化学科）
生徒・保護者ともに大変好評であった。

２　平成１４年７月１８日（木）午後　茨木市立西中学校において、茨木工業高等学校環境化学科の教員２名による出前授業を実施した。参加者４４名。
メインテーマ「やさしい環境教育」　Ａ「ミミズのちから」、Ｂ「犯人は誰だ」
実物観察や楽しい実験などを通して授業を実施し、好評であった。

３　平成１４年７月１８日（木）午後　茨木工業高等学校において部活動体験を実施した。
参加者数約３０名。
バスケットボール部は、中学１年生のみ来校し、専門教員による指導を受けた。

４　平成１４年１２月１６日（月）午前　西中学校１年生理科の授業を茨木工業高等学校で実施した。参加者数２７名。
天体望遠鏡による太陽観察、世界の化石観察
茨木工業高等学校理科研究部の生徒９名も参加し、授業の補助を勤めた。

５　平成１４年１２月１６日（月）午後　大阪府立茨木工業高等学校各実験室および溶接工場において「楽しいものづくり体験」を実施した。参加者１５名。
（１）フラワースタンドの製作（機械工学科）
（２）電子オルゴールの製作（電子工業科）
（３）七宝焼の製作（環境化学科）
昨年に引き続き好評であった。

○今後の課題として残ったこと及びその対応策

事業終了後も連携は維持したい。そのためには経費があまりかからない出前授業などを継続したい。
また、地域教育協議会主催での天体観測会も継続させたい。

○２年間の研究の全体的な評価

これまでほとんど交流の無かった両校がこの事業を通じて協力し、中学生の専門高校への理解と、専門高校の活性化を推進することができた。

○　リンク先

大阪府立茨木工業高校のＵＲＬ　http://www.osaka-c.ed.jp/ibaraki-t/
茨木市立西中学校のＵＲＬ　http://www.educ.city.ibaraki.osaka.jp/nishi-j/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書の概要

都道府県名　　大阪府
推進地域名　　堺市

1　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

（１）研究テーマ

「地域連携と”ものづくり”体験学習」「”鋼板とプラスチックを使って”の製作実習」

（２）研究の特に重点を置いたところ

①　小・中学生の”ものづくり”への意欲関心を高めること。
②　小・中学校に対して本校生が、指導することで生徒自身の学習意欲を高めること。
③　小・中学校の生徒、教員、保護者の専門高校への理解を深めること。
④　地域の学校・団体の人々との交流を図り、相互理解を深めること。

2　連携推進事業の活動状況等（生徒への指導や校内調整会は含まず）

平成13年　9月10日　第1回連携推進地域協議会，10月17日 第2回連携推進地域協議会，10月22日 第1回中高担当者打ち合わせ会，12月 1日　第3回連携推進地域協議会・13年度小学生の体験学習，

平成14年　3月25日　学校施設・見学（東京都立本所工業・工芸高等学校），9月12日　第2回中高担当者打ち合わせ会，10月 3日・8日　事前授業（中学校へ出前授業），10月 9日～12月18日　中学生体験学習（2年1組），12月 3日　平成14年度　小学生の体験学習

平成15年　1月29日　第3回　中高担当者打ち合わせ会

3　推進校における活動の実施状況等

小学生 テーマ　「伝統工芸士による刃物づくりの見学・体験」「竹とんぼづくり」「相撲ロボットで遊ぼう」

中学生 テーマ　「金属プレス機を利用したブックエンドの製作」「射出成形機でのプラスチックの成形」

4　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

（１）課題

①　初めての取組みということもあり、連携にスムーズさにかけた面があった。
②　中学校の説明で「体験学習」の目的が、中学生に明確に伝わっていなかった。
③　連携校間の授業計画・内容等の調整が難しく、充分な時間を確保することが難しい。
時期的に、中学校で行っている「職業体験」が、体験学習のあとになっているので、やはり「職業体験」を行った後に体験学習を行えば導入・興味づけがスムーズに進むであると考えられる。
④　教材（テーマ）に関しても、小・中学生に押しつけ的に決めたので、もう少し小・中学生の希望を調査して決めることをしなければならない。
⑤　地場産業への理解と関心を高めることを取り組んできたが、具体的には、教員主導的な活動になってしまった。この件に関しては、今後の課題である。
⑥　安全に対する対処の共通理解が必要である。たとえば、小学生が予期しない行動に対する安全対策（安全ロープ、ビニールシートなど）を教員相互に綿密に考えなければならない。

（２）対応方策

①　小・中学生に、「職業体験」などの心得や、体験学習の意義などについて時間をかけて指導することが必要であり、このことへの小・中・高の連携が鍵となる。また、高校側もできる限りのお手伝いするように努力すべきである。
②　連携校間で、事業の趣旨を改めて見直し、細部にわたる調整が必要と思われる。特に、授業の観点や年間行事計画などについては、連携事業を実施しなければ相互に理解し得なかったことである。

5　２年間の研究の全体的な評価

（１）　連携事業に参加した小・中学生を中心に、”ものづくり”への関心が高まり、創造の喜びと共同作業を通して思いやりの心を伸長できたと判断できる。

（２）　小・中学生に”ものづくり”を通して、技術や楽しさを知ってもらい、その必要性や工業技術の興味・関心を高めてもらうこと。また、中学生の専門高校への理解を促し、その活性化を図ることができた。

（3）　校の教員が専門性を発揮し、小・中学生を指導したことで、生徒は学習内容の理解の向上、さらに、小・中学生に工業の意味と必要性を考えさせることに成功したと判断している。特に、高校の教員が小・中学校の教員と相互に理解し合い、つながりができたことが、何よりも大きな成果であった。

○　リンク先

http://www.osaka-c.ed.jp/sakai-t/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　大阪府
推進地域名　美原町地域

○　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

（１）　研究のテーマ「農といのちと仲間とのふれあい」

（２）　特に重点を置いたところ

①　一人一人の児童が継続的に勤労生産学習を体験する

②　生命を慈しむ心を育て、先人の知恵に触れる

③　仲間や先輩と協力して活動を行う

○　連携推進地域協議会の活動状況

連携事業実施計画作成。活動内容、日時等詳細について調整、連絡。実施後の児童の評価測定等（児童の感想文による）実施内容のまとめ、反省、報告、総括。今後の実施計画の作成

○　推進校における活動の実施状況等

概要	活動の内容、教育課程上の位置づけ		連携先の概要、教育課程上の位置づけ
大阪府立農芸高等学校ハイテク農芸科　２年（８人）、３年（７人）又は、２．３年（１５人）	種籾の比重（塩水選） 箱苗作り 田植え 稲刈り 脱穀	藁遊び ジャガイモの観察 ジャガイモの収穫 収穫祭	美原町立西小学校 ５・６年生（７７人） ３・４年生（８８人）又は １・２年生（７６人）生活科
	総合実習		総合的な学習の時間

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

（１）　農芸高校の生徒がより多くの項目で作業について児童に説明、指導を行えるよう、さらなる技術指導を図るよう努力する。

（２）　ジャガイモにおいては、「継続的、一貫した農業体験へ」のねらいの元、連携する中で内容を変更した。今後もより児童、生徒にあったものへとカリキュラムを見直し、より密な連携へ向け努力する。

（３）　本年は本校においては一つの部の１５人程度の生徒の協力を得、連携を実施したが今後はより多くの生徒に関わってもらい、児童とマンツーマンに近い形で、より多く、そして密な交流、連携を目指し、生徒全体で受け入れを実施したい。農業科学基礎（約４０名）等を利用した本校の授業展開について検討したい。

（４）　まずは西小学校の保護者等にも児童とともに田植等稲作を体験して貰いたいため、保護者へのＰＲや実施計画，その方法について検討する。

（５）　活動内容拡大予定の農産物加工、動物飼育体験を西小学校の教育課程にどう位置づけるのか検討する。

○　２年間の研究の全体的な評価

今回の取り組みにより、以下のような成果があった。

（１）　大阪府立農芸高校生について

①　児童に作業を見せること、質問に答えることなどの経験を経て、学習や実習により積極的に取り組むようになった。

②　自分自身では理解していてもそれを相手（児童）に伝えるという表現の難しさを知り、様々な工夫を行うようになった。

③　異世代と交流することで、生徒と、児童が少し身近な存在となり、生徒の実習ノートにも「楽しかった。また、接したい」とあった。又、帰り等に言葉を交わす者も見られたことは、大変喜ばしい。

（２）　美原町立西小学校生について

①　昨年度の約２０時間の実習体験をふまえ、本年度は教員の指示の前に株切り、落ち穂拾いが行えるなど、知識を経験（体験）することで自発的な行動が見られた。

②　下校中に立ち寄り、水田や周りの様子を見に行き、質問をする様子が見られるなど、地域、自然、季節に対して関心の深まりが見られた。

○　リンク先

http://www.osaka-c.ed.jp/nougei/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告の概要

都道府県名　　兵　庫　県
推進地域名　　姫　路　市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

理科離れや科学離れが進む中「ものづくり」を教育の中心に置いている専門高校が、今以上に実習や課題研究に取り組み、「ものづくり」が社会に果たす役割と重要性を生徒自身が認識し、意欲的に学習する態度を養い、その結果を次世代を担う小・中学生に対して伝えるとともに、体験活動を通して「ものづくり」の楽しさも伝える。さらに保護者にも専門高校への理解を促し、さらなる活性化を図ることに重点を置いた。

○連携推進地域協議会の活動状況等

平成１３年７月３１日（火）に第一回連携推進地域協議会を開催し、主旨・目的等を確認した。また、加治佐委員から教育現場の現状等の説明がなされ、より教育効果を高めるための指針・重点課題等の指導助言がなされた。これを受けて、平成１３年９月２７日（木）実際の運営活動を司る第１回の実行委員会（小学校担当教諭１名、中学校各々教諭１名、高校教諭４名）が開催された。実行委員会の報告を受け校内の推進を行うべく校内推進委員会（６学科長を中心とし、他に総務部長・教務部長・各学年主任）にて実施内容等の検討が行われた。この結果にもとづき平成１３年度の連携推進事業が実施された。

平成１４年７月１７日（水）平成１４年度第一回連携推進地域協議会が開催され本年度の実施予定内容等の検討が行われた。その中で、竺沙委員より本来あるべき連携推進事業のあり方について指摘があり、実施に向けて小学校・中学校の教育課程上の年間指導計画に沿って実施することとなった。また、児童が来校したり、高校生が小・中学校に出かけて交流事業を初めて実施した平成１４年１１月７日に（木）は、竺沙委員に直接現場で取組状況を見ていただいた。平成１４年１１月１８日（月）には加治佐委員に取組を見ていただいた。平成１４年３月１７日（月）第２回連携推進地域協議会の反省・指導助言をもって終了した。

○推進校における活動の実施状況等

【機械科・電気科・工業化学科・デザイン科・溶接科・電子機械科】の６科で実施

『平成１３年度実施分』２月以降は、大部分のテーマは姫路工業高校生２年生にて対応

①平成１３年１１月１７日（土）城乾中学校２年生１０２名、１２テーマで実施
②平成１３年１１月２２日（木）広嶺中学校１年生７０名、１２テーマで実施
③平成１３年１２月７日（金）城北小学校６年生６４名、７テーマで実施
④平成１４年２月２２日（金）広嶺中学校２年生１０７名、１３テーマで実施
⑤平成１４年３月７日（木）城乾中学校２年生９１名、１１テーマで実施
⑥平成１４年３月１１日（月）城北小学校６年生７１名、８テーマで実施

『平成１４年度実施分』２月以降は、大部分のテーマは姫路工業高校生２年生にて対応

①平成１４年１０月８日（火）城北小学校６年生２クラス約６５名来校顔合わせ
②平成１４年１１月８日（金）城北小学校へ本校デザイン科２年生４０名出向き、鬼瓦製作指導
③平成１４年１１月１８日（月）城乾中学校２年生８９名、９テーマで実施
④平成１４年１１月２６日（木）広嶺中学校２年生１１０名、１１テーマで実施
⑤平成１４年１２月１２日（木）広嶺中学校２年生８０名、９テーマで実施
⑥平成１５年２月５日（水）城北小学校６年生１クラス３５名、電気科で実施（理科分野）
⑦平成１５年２月７日（金）城北小学校６年生１クラス３４名、電気科で実施（理科分野）
⑧平成１５年２月１０日（月）城乾中学校２年生９０名、９テーマで実施
⑨平成１５年２月１７日（月）広嶺中学校２年生８０名、８テーマで実施
⑩平成１５年２月２４日（月）広嶺中学校２年生１１１名、８テーマで実施

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

今後も継続して欲しいとの強い要望のあるなか、せっかく出来た環境を物心共に今後、どのように発展させるか。学年全体を対象とせず興味・関心のある児童・生徒に限定した連携事業を実施するとともに、予算的な裏付けが是非必要である。

○２年間の研究の全体的な評価

小学生・中学生に対して、また対象校職員に対しても非常に実りの多い取組となった。反面、本校にとって非常に大きな負担となったことは現実である。

しかし、連携事業を推進することで、本校生や小・中学生に対して人間関係の大切さや、ものづくりに対する大変大きな動機付けとなったことは事実である。

○　リンク先
http://www.hyogo-c.ed.jp/~himeji-ths/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書の概要

都道府県名	奈 良 県
推進地域名	吉 野 町

○　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

吉野の地場産業を活かしたものづくりや体験を通して、地域のもつ素晴らしさや専門高校のもつ魅力を再発見させる。

○　連携推進地域協議会の活動状況等

・県教育委員会と吉野町教育委員会との打合せ会議（６回実施）
・連携推進協議会（６回実施）
・専門高校と吉野町教育委員会との打合せ会議（６回実施）
・専門高校と小・中学校との打合せ会議（１２回実施）

○　推進校における活動の実施状況等

・吉野のスギ・ヒノキの単板や和紙・割り箸等の特産物を利用した行燈（あんどん）を作製し、「山灯（やまあか）り展」のジュニア部門に出品した。
・ＮＣ旋盤で製作した、星形や丸形、流線形の木片を、ダイスギやコノテヒバの苗木に飾り付けをし、オリジナルのクリスマスツリーを製作した。
・サルビアやマリーゴールドを播種からポット苗に移植、花壇への定植まで、一連の過程を学習した。
・「卒業式に桜の花を咲かせる」取組を行った。
・木材を加工する楽しさを味わってもらうため、用具の安全な使い方を体得し、アガチス材を用い、比較的容易に作れる木製パズルの製作から始めた。最終的に、中学生は「マガジンラック」、小学生は「本立て」の製作を行った。
・バックホウによる掘削操作、高所作業車による作業床の移動等、オペレーター体験を行った。

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

(1) 参加した児童・生徒が体験した「内容を発表し合う」「互いに評価し合う」等の時間を設けることができなかった。したがって、「まとめ、評価」については、各校に依頼をしたので、結果として率直な感想や意見の報告を受けた。
(2) 安全性と効率性の高い内容を考え、「自ら考え、自ら判断する」ことに重きをおいて実施したが、時間の制限を受け、方法や技術面において子どもたちの「個性」をうまく表現できなかった。

○　２年間の研究の全体的な評価

(1) 各科が計画したすべての体験教室を終え、参加した児童生徒が、花づくりやものづくり、オペレーター体験等を通して、専門高校の学習内容を理解するとともに、深い興味・関心を抱いてくれたのは、大きな成果であった。
(2) 小・中学校で使用することのない木材加工機械や建設機械に触れながらの体験学習は、新しいことへの挑戦となり、自分の予想を超えた体験に歓喜する児童・生徒の姿が見られた。
(3) 同時に、指導にあたった本校生が、小・中学生にやさしく丁寧に接している姿や事前学習に熱心に取り組む自主的な姿を見ることができた。
(4) ２年間のこの取組が、地域の活性化や異校種間の交流に好結果を残すことができ、今後においても継続的な取組を強く希望する小・中学校の声が多かった。したがって、今年度で終了となる事業であるが、吉野町の強い要望を受け継続して連携事業を行うこととなった。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業報告書

都道府県名　　和歌山県
推進地域名　　橋 本 市

○　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

次の３点を研究推進の基本的な考え方とした。

・　西部小・西部中学校と紀北工業高等学校とのモノづくり等の体験・交流を通じ、工夫してモノをつくり出す楽しさ、科学する面白さを実感する機会と捉える。
・　高校生が小中学生にモノづくり等の指導を行うことで、自ら学んだ知識や技能の価を再確認し、伝えることを通して自己有用感（誇り）を感じ取る絶好の機会とする。
・　小・中・高等学校の連携の姿・成果を積極的に公開することで、地域から理解され、信頼される学校づくりを推進する。

○　連携推進地域協議会の活動状況

保護者地域の方々とのネットワークづくりを進めた。

・　地域公民館主催の地域交流事業に高校生、小中学生が参加し、モノづくりの体験活動コーナーを受け持ち、地域住民にこの事業の一端を紹介する。
・　保護者を対象とした科学教室を実施する。
・　工業高校の文化祭、国際交流、公開授業を地域、小中学生に開放する。

○　推進校における活動の実施状況等

・　専門高校と小中学校との連携授業参加（科学教室）
専門科各科が実施テーマを設定、小中学生を指導する。
・　高校教員の小中学校への出前授業指導
理科、数学、福祉等について、総合学習の時間の一環として行う。
・　国際交流、文化祭への招待
文化祭のイベントとタイアップして、韓国・青鶴工業高校との国際交流に小中学生を招待、国際交流の雰囲気を体験
・　地方祭「ふれあって！西部」への出展と技術指導

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

・　高校生徒だけによる小中学生の指導は、その伝達能力と危険防止を考え併せると、どうしても教師の立ち会いが必要になる。指導にあたる高校生に対し、授業の目的やねらいを明確にさせ、それを達成するための指導方法や説明内容等を自ら考えさせるなどの事前指導を充実させる。
・　小中学校と推進高校間の行事日程調整に苦慮。高校生、高校教員の指導時間不足
連携校間でのカリキュラムの検討、実施時期・時間・場所・人数等、充分な打ち合わせを行う。
・　教科との関連をもたせ、授業にも生かせる内容の計画をたてる必要がある。
連携校相互の年間指導計画、教育目標と照らし合わせ計画的に実施する。

○　２年間の研究の全体的な評価

・　児童生徒の意欲関心が高まった。
高校生が小中学生に指導するという場面は新鮮で、小中学生にとっては「モノづくり」の楽しさや科学への関心を高めさせる効果がある。また、教えることにより小中学生自身の学習意欲を高めるという趣旨は、経験を重ねる毎に目的を達成できた。
・　学校の研究テーマと関連づけた事業推進が進められた。
・　専門高校教員の「出前事業」に意欲的に取り組めた。
・　地域の学校理解が深まった。
地域事業への小・中学・高校生の参加協力や高校の文化祭や学校開放等の試みは、地域の方々の学校理解を進めることにつながった。取り組みを情報公開することで小中学校と専門高校との連携事業が評価されている。

○　リンク先

http://www.kihoku-th.wakayama-c.ed.jp

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　鳥取県
推進地域名　智頭町・用瀬町

・研究テーマ及び研究に特に重点を置いたところ

高校生は、充分な事前準備のもと、小・中学生に知識・技術を教える喜びを知り、そこから自らの学ぶ意欲を高める。小・中学生は、高校生から学ぶことで、専門高校の理解と外から見た高校生ではなく、交流をとおして高校生の姿を理解する。

体験をとおして、多くの学ぶ喜びが実感できるよう、児童・生徒が主体となる事業とすることに重点をおいた。

・連携推進地域協議会の活動状況

第１回連携推進地域協議会　平成１３年９月２５日（火）智頭農林高等学校
・事業の説明　・全国の実践例の紹介・連携体制の確認
専門高校には各連携校の担当者を決定

第２回連携推進地域協議会　平成１４年１月３０日（水）白兎会館
・平成１３年度事業の説明・推進校における活動の成果と課題　・研究の全体的な評価及び今後の課題

第３回連携推進地域協議会　平成１４年５月３１日（金）智頭農林高等学校
・平成１３年度事業の報告　・連携体制の確認　・平成１４年度事業の計画・予算の説明及び承認　・県内普及用報告集作成の説明

第４回連携推進地域協議会　平成１５年２月１９日（水）白兎会館
・平成１４年度事業の説明　・推進校における活動の成果と課題
・研究の全体的な評価及び今後の課題と今後の活動に向けて・県内普及報告集の説明

・推進校における活動の実施状況等

智頭中学校

桜土手花壇への花の植栽活動を行った。花壇苗作りから連携して行い、夏のニチニチ草、秋のコスモス、冬・春のパンジーと１年間を通して地域の環境美化に取り組み、中学生と高校生が連携して郷土愛を育むことができた。

用瀬中学校

用瀬中学校の花壇整備活動を行った。花壇苗作りからの連携、花壇園路作り、枕木花壇作りと専門高校の知識技術を充分に発揮できた。中学生と高校生の手作りの学校花壇整備事業ができた。

智頭小学校

智頭スギを使ったものづくり体験を行った。巣箱・鳥笛・プランターボックスを製作した。智頭農林高校の進んだ施設設備を使用して、ものづくりの大切さ・おもしろさとあわせて地元産業の理解に役立つことができた。

土師小学校

演習林で山の大切さ（スギの枝打ち、皮剥き、伐倒）と山の恵み（山芋掘り、岩魚つかみ）を体験し、智頭林業・森林の大切さを理解できた。

・今後の課題として残ったこと及びその対応方策

活動の重点に置いたように児童・生徒が主体となるような事業に取り組んだが、これには高校生の技術・指導力の向上が必須となる。今まで以上に生徒も授業を受ける時の曖昧さに気付き、教員も生徒を中心に置いた授業に常に取り組む事が、連携事業発展の対応方策となる。

・２年間の研究の全体的な評価

手作りの花壇整備、桜土手の花の装飾、智頭スギを使ったもの作り、林業体験活動と智頭農林高校の専門的な教育力を小・中学生に還元でき、専門高校の理解促進とその活性化が図られた。また、小・中学生はそれぞれの学校で取り組む「総合的な学習の時間」の成果につながったと考えられる。小・中学生は農林水産体験やもの作り体験学習を通して、生命・自然を大切にする心を育み、高校生は小・中学生を指導することで、日頃の学習の大切さに気付くことができた。高校生の小・中学生に対する多くの思いやり、小・中学生の高校生に対する多くの感謝の気持ちに接することができ、側に立ち見守った教員も心豊かになり、次に我々が何ができるのか積極的に考えられる事業であった。連携事業により、専門高校の理解促進と豊かな人間性の育成というねらいに充分近づけたと感じている。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　島　　根　　県
推進地域名　隠岐郡西郷町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
（１）テーマ：「海」―世代を超えた交流
（２）特に重点を置いたところ
① 小・中学生が海にかかわりをもつことにより、専門高校への理解・関心を高める。
② 実習等を通して勤労観を培う。
③ 専門高校の生徒が児童生徒を指導することによって、生徒自身の学習意欲の向上と他人を思いやる心を育てる。
④ 海洋を含めた環境保全の大切さを認識させる。
⑤「見て」、「触れて」、「体験する」ことによって海洋を含めた環境保全について、理解・興味を深めることができるようにする。

○連携推進地域協議会の活動状況
（１）　日　時　　平成13年8月22日(水)
　　内　容　　平成13年度の取り組み内容、日程・事業確認等協議
（２）　日　時　　平成14年6月20日(木)
　　内　容　　平成13年度の反省と14年度の計画確認

○推進校における活動の実施状況等
①トビオウの練り製品作り（６回）
②栽培漁業体験、ヒラメ・鯉の放流、金魚の飼育、カキ出荷作業体験
③カッター体験乗船（２回）、練習船体験航海（１）、水上バイク試乗

○今後の課題として残ったこと及びその対応策
（１）漁業科栽培コース
①児童・生徒への継続的な指導が課題である。
②試食までの衛生面のマニュアル等があれば参考にして今後考えてみたい。
（２）　水産製造科
①内容によっては年間を通して変化を追うようなものを行いたい。
②推進校以外からの問い合わせがあり出来るだけ引き受けたが、都合で出来ない小学校もでてきたので、今後は小学生の数によっては２校同時に行いたい。

○２年間の研究の全体的な評価
（１）漁業科栽培コース
①本校生徒に自信や自覚ができ、思いやりのある行動も身につき、積極性がみられた。
②小学生は楽しんでくれた。
（２）　水産製造科
①推進地域の小学校に限らず、いろいろな小学校と事業が出来た。
②高校生も自分の出身小学校の生徒が来校することを喜んでいた。
③本校３年生は２年目なので自主的に行動し、児童を指導しかつ親しまれていた。
④２年生は初めてなので、３年生のようにはいかなかった。
⑤評判を聞き推進校以外の小学校からも問い合わせがあった。
⑥中学校とともに事業を展開することは、時間的に無理である。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名	岡　山　県
推進地域名	瀬　戸　町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

農業・家庭科に関する学科を持つ専門高校として，両科の有する教育的資本を有効に活用することにより，地域の小・中学校の児童・生徒に，体験活動等を通して「生命」の大切さや「自然」の素晴らしさを体得させる場となるよう事業内容を計画した。また，日頃高校生が学習していることを題材に設定して，小・中学生が学習している内容とかけ離れたものにならないよう配慮した。

○連携推進地域協議会の活動状況

・平成 13 年度第 1 回連携推進地域協議会（9/4），第 2 回連携推進地域協議会（2/2）
　連携体制の組織化，連携推進の在り方，平成 13 年度の計画・実施，成果と評価

・平成 14 年度第 1 回連携推進地域協議会（7/16），第 2 回連携推進地域協議会（3/18）
　平成 14 年度の計画・実施，２年間の研究の全体的な評価，今後の連携の在り方

○推進校における活動の実施状況

この事業では，小学校２校と中学校１校を連携校とし，それに対して専門高校の３科（生物生産科・園芸科学科・家政科）の学科で，事業内容に関係の深い専攻生が対応した。基本的には，低学年の児童に対しては「いのちの大切さ」，「自然の不思議」，「農業の役割」といった点を，また高学年の児童及び中学生に対しては，ある程度専門的な知識や技術を指導し，自ら考えさせたり判断させることを重視して実践した。小学生と中学生では受け取り方には微妙な差があるが，年齢の近い高校生から何かを教えてもらうという体験は，知識・技術を習うという点で予想以上の効果的がみられた。また，高校生はどの生徒も，自らが身に付けている知識・技術を総動員させて，相手にわかってもらおうと懸命に話しかけ，文字通り「指導」をしていた。生徒にとって自分の知識・技術で小学生や中学生の目を輝かせた体験は，それらの知識・技術をより確かなものにするだろうし，さらには自信と誇り，学習への向上心を得てくれたものと確信している。

○今後の課題として残ったこと及びその対策

推進校間の移動手段と時間数の確保の問題，特に高校と小・中学校の教育課程上の時数と一日の時程との関係で，交流や体験活動に時間的な制約があるのが現状である。
また，専門高校側の学習のねらいと小・中学校側の期待する学習効果が必ずしも一致しないこともあり，事前の打ち合わせを今以上に綿密に行い，長期的な展望のもとに計画を進めるようにしたい。

○２年間の研究の全体的な評価

本事業は，専門高校が小・中学校との連携活動においてどのような役割を果たすことができるか，また，その役割を果たす中で，専門高校の生徒がこれまでに学習してきたことをどのように生かし活用することができるか，いかに「自己教育力」と「生きる力」を育んでくれるかを期待して実施してきた。その結果，小・中学生の学習の場として，農業や食料，或いは動植物を通しての情操的教育の場になり得ることは十分に証明されたと考える。今後もより精選した事業内容で，有効な連携活動を継続していきたい。

○　リンク先

http://www.setomina.okayama-c.ed.jp/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　広　島　県
推進地域名　吉　田　町

○　研究テーマ及び研究において特に重点をおいたところ

「食」と「農」に関する学習をとおして，「新たな学びのもと」をつくる専門高校と小・中学校との連携の在り方に関する研究

吉田町は，広島県の中山間地域の田園地帯であるが，その地域に所在する小・中学校といえども，大規模な施設・設備を必要とする「食と農に関する学習」を体験的に学ぶ機会は少ない。

そのため，食糧を生産する「農」と，食べるという根元的な活動である「食」をとおして，生きることの本質的な意味を体験的に理解させるための支援の在り方を研究するとともに，その支援活動をとおして農業高校に学ぶことの意味や価値を体験的・自覚的に認識させるような連携の在り方について研究する。

さらに，小・中学校の教員とともに，「総合的な学習の時間」において展開可能な教材開発，学習内容の構築を行う。

○　連携推進地域協議会の活動状況等

公開授業と合わせて，「広島県専門高校と小・中学校との連携推進協議会」を開催した。

①　小・中学生と専門高校の生徒との連携にかかわる効果的な農業体験活動の内容について
②　農業高校の教員と小・中学校の教員との連携の在り方について
③　研究授業，「総合的な学習の時間」研究会の成果と反省

○　推進校における活動の成果と課題

・　吉田高校
　連携交流学習として取り組んできた５年間の活動をもとに継続的に連携活動を実施することができ，リーダーの育成，教えることの喜び・難しさ，学習してきた知識・技術の反復の重要性等，多くのことを学習させることができた。
・　吉田中学校
　課外活動を利用して，フラワーアレンジメントによる交流を，各週で半年間にわたり継続して実施してきた。基礎的なコサージ作りや小型アレンジからはじめ，３月には高校と中学校の卒業式で，協力しあい大型アレンジの製作に取り組むことができた。
・　吉田小学校
　吉田高校と隣接した立地を生かし，教職員間の綿密な連携を行うことができ，糖度計を利用した授業やクッキーの作成，フラワーアレンジメント等，内容の充実した活動となった。
・　郷野小学校
　これまでの５年間の実績を踏まえた連携交流により，ニワトリのくん製作りからシイタケの栄養素調査等，「総合的な学習の時間」等で実践可能な充実した活動を行うことができた。

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

・　中学校における教育課程上の位置づけ
・　知的好奇心を引き出す指導法
・　教職員を対象とした継続的な教材開発のすすめ方

○　２年間の研究の全体的な評価

吉田高校では，５年前より小学校をはじめ，保育園・幼稚園，老人福祉施設，公共機関等と連携を取り「連携交流学習」と銘打って取り組んできた。この度，２年間の専門高校と小・中学校との連携推進事業の指定を受けることで，これまでの取り組みを再度検証し直し，連携校の校種や連携する学習内容に広がりを持たせることができた。

特に，小学校との連携においては，平成１４年度から「総合的な学習の時間」が完全に実施されることから，体験的な学習を中心にして，実際の「総合的な時間の学習」で実践しやすい内容で連携を行うことができた。

一方，中学校との連携においては，放課後の連携に留まることとなった。

「総合的な学習の時間」の教材開発支援と指導者養成・指導力向上に関わる取組みについては，平成１４年度から研究会の組織を立ち上げ，来年度以降も継続的に連携していく道筋をつくることができた。

今後も，本事業の研究により得た成果と課題を再度整理し，地域の特色を生かした吉田町独自の連携交流学習として充実，発展させたい。

○　リンク先

http://www.yoshida-h.hiroshima-c.ed.jp/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名	山　口　県
推進地域名	小　郡　町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
（研究テーマ）「農業高校と小・中学校との連携の在り方や方法等について検討する」
（研究において特に重点を置いたところ）
ア　農業高校と小学校との連携について
・小学生が生命・自然を大切にする心をはぐくむための農業体験の在り方
・それぞれの学年における、具体的な活動を通した小学校との連携の在り方
イ　農業高校と中学校との連携について
・中学生が職業観や勤労観を身に付けるための農業高校との連携の在り方
・中学校における「総合的な学習の時間」の実践事例
○連携推進地域協議会の活動状況
ア　第１回連携推進地域協議会
・期　　日　　平成１３年８月８日（水）
・協議事項　　本協議会の設置要綱の確認、会長・副会長の承認、事業概要の確認、全国連絡協議会の報告、研究協議
イ　第２回連携推進地域協議会
・期　　日　　平成１４年２月１３日（水）
・協議事項　　平成１３年度の事業報告、平成１４年度の取組み方針等
ウ　第３回連携推進地域協議会
・期　　日　　平成１４年７月１７日（水）
・協議事項　　人事異動に伴う委員変更の確認、全国連絡協議会の報告、平成１３年度の事業内容の確認､研究協議
エ　第４回連携推進地域協議会
・期　　日　　平成１５年２月１２日（水）
・協議事項　　平成１３・１４年度２か年間の事業報告、研究協議
○推進校における活動の実施状況等
ア　農業高校と小学校との連携について
・小学生にとっては、各学年の取組みを通して生命・自然を大切にする心をはぐくむとともに、農業への理解を深め地域にある専門高校を知る機会となり、農業高校生にとっては、実践活動の企画・運営等を通して学習意欲の向上が図られた。
イ　農業高校と中学校との連携について
・中学生にとっては、自分自身の将来の職業を考える上で貴重な体験となり進路意識の向上が図られ、農業高校生にとっては、比較的年齢の近い中学生との交流活動を通して専門高校生としての自覚が芽生え、学習意欲の向上が図られた。
○今後の課題として残ったこと及びその対応方策
今後の課題としては、本事業の実践校での連携活動を発展させていくための具体的な支援策や本事業の成果をどのように広く県全体に普及啓発を図っていくかなどがある。
その対応策としては、実践校での連携体制をより一層強化し、本事業の成果を保護者や地域の人々に紹介するなどし、より充実した連携活動に発展させていくことが重要である（平成１５年度については中学校の活動費が予算化された）。また、２年間の実践報告書を作成し、広く県全体に配付することも普及啓発を図る上で有効な方法である。
○２年間の研究の全体的な評価
小学校との交流では、全ての学年の児童と農業高校生との交流活動が実現したことは大きな成果となった。また、中学校との交流では、中学２年生全員を対象に「総合的な学習の時間」を活用した連携活動を行い、本事業の趣旨に合致するとともに、中学校の「総合的な学習の時間」の貴重な実践事例の一つになり、大きな成果となった。

○　リンク先
http://www.ymg.ed.jp/yamaguchi-ah/　　（～平成１６年３月）
http://www.yamaguchi-a.ysn21.jp/　　（平成１６年４月～）

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　徳島県
推進地域名　阿南市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

児童生徒に対し，植物の栽培や実験・実習を行うことで，農業教育に対する興味・関心を持たせる。また，連携をとおして，地域に根づいた特色ある高校づくりの在り方等を探る。

特に重点を置いた所としては，次のとおりである。

（１）高校の特色（農業科の類型学習）を生かした活動内容とした。

（２）小・中学生（児童生徒）からの希望や教師からの要望，また，高校生の意見等を取り入れ，生徒の主体的な意欲を喚起し，取り組むべき学習や活動が理解できるよう工夫した。

（３）保護者や地域の理解を促し，高校の応援団としての地域づくりを試みた。

○連携推進地域協議会の活動状況等

事業の推進にあたっては，先に，事業計画案をもとに小・中学校の校長・担当者を交えた検討会を行い，全体計画・日程等の調整や，学習内容，児童生徒の実態等を共通理解するなど推進体制の整備に努めた。

○推進校における活動の成果と課題

本事業を魅力溢れる特色ある学校づくりの一環と捉え，研究に取り組んだ結果，地域の小・中学生にとって親しみやすい農業高校との感想を得た。また，高校生や教職員にとって，児童生徒やその保護者等普段学校生活では，接することの少ない人達との交流を持てた。

新野高校は，平成１５年度より総合学科としてスタートを切ることとなったが，２年間の活動で得た成果を一時的な学びで終わらすことのないよう，地域に支えられ地域と共に成長する高校となるよう計画的・組織的な学校づくりを推進する。

○２年間の研究の全体的な評価

（１）連携推進事業の実施にあたっては，高校の特色（農業５類型の各専攻生徒が中心）を活かした学習活動が展開できた。

（２）新野高校の様子について広報でき，児童生徒やその保護者，教職員間の交流が図れ，小・中学校における学習の様子や，児童生徒の実態も理解できた。

（３）高校生は，学習内容を分かりやすく説明する工夫や，実験・実習の指導を円滑に進めるための生徒間の協議，教師に質問するなど納得のいくまで検討し，準備を進めたことから，学習の定着化が図れた。また，積極的なコミュニケーション能力や，プレゼンテーション能力の基礎が身についた。

（４）生徒の学習意欲喚起と，教師の指導方法の工夫により教育の質的な向上が見られた。

（５）学校開放や，地域との連携について考える貴重な機会となった。

○　リンク先

http://www.aratano@aratano-h.ed.jp

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　香 川 県

推進地域名　　多度津町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

「工業高校生が小・中学生にものづくりの指導をすることにより、小・中学生のものづくりへの興味・関心を高めるとともに高校生の学習意欲の向上を図る。」をテーマとして、小・中学生及び高校生が、行事により主体的に参加できる事業のあり方について研究した。また、事業の各行事を教育課程の中にどのように位置付けるかについても研究した。

○連携推進地域協議会の活動状況

第１回連携推進地域協議会（平成１３年７月５日開催）
・連携推進地域協議会の発足
・具体的な活動内容を計画・立案する連携推進委員会の組織案の検討

第２回連携推進地域協議会（平成１４年２月１３日開催）
・平成１３年度の活動内容の報告及び平成１４年度の計画

第３回連携推進地域協議会（平成１４年５月８日開催）
・発展性を持った行事の企画及び具体的な活動内容の調整・確認

第４回連携推進地域協議会（平成１５年２月１９日開催）
・平成１４年度の活動内容の報告及び今後の継続方策

○推進校における活動の実施状況等

≪平成１３年度≫

高校生が中学生を指導――多度津中学校３年　選択教科理科
ものづくり体験学習「わくわく体験 in 多工」――小・中学生が体験（教育課程外）
高校生が小学生を指導――豊原小学校５年　総合的な学習の時間
ものづくり講演会――多度津小学校６年　理科

≪平成１４年度≫

高校生が中学生を指導――多度津中学校３年　選択教科技術・家庭
高校生が小学生を指導――多度津小学校４年　総合的な学習の時間
多度津小学校５年　図工　　豊原小学校３年　総合的な学習の時間
豊原小学校４・６年　理科　　豊原小学校５年　図工
ものづくり体験学習「わくわく体験 in 多工」――多度津小学校・豊原小学校の５年総合的な学習の時間
ものづくり講演会――多度津工業高等学校１年　特別活動

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

（１）平成１４年度の本事業の取組みは、すべて教育課程に取り入れた形として実施できたが、中学生の授業では選択教科「技術・家庭」での参加となり、進学先を選択する時期にある中学生において、全員参加の形がとれなかった。今後は、各学校間の教育課程を再度検討するなど、全員の中学生が一度は専門高校での「ものづくり」体験ができるようなシステム作りが必要である。

（２）それぞれの学校の設備で体験活動をすることもあり、往復の交通手段や安全確保が問題となる。また、体験活動の安全教育の徹底が必要である。町教委や地元企業の協力体制を一層充実させたい。

○２年間の研究の全体的な評価

（１）小・中学生は高校生が指導する「ものづくり体験」をとおして、自分の作品を完成させるという喜びや満足感を味わうことができ、専門高校の学習に興味を持つことができた。また、高校生は、小・中学生を指導する中で相手の目線に合わせた親切な対応ができるようになったり、小・中学生が旺盛な好奇心を持って授業に参加する姿勢を見ることにより専門教科の学習に積極的に取り組むようになった。

（２）単に「ものづくり」を楽しむだけでなく発展性をもった行事とするため、ゴミ箱を作って町内に設置しどのようなゴミが出されているかを調査したり、製作した実験道具を小学校に寄贈して活用してもらう等の試みを実施した。児童・生徒それぞれに満足感が得られ成果があった。

（３）この連携推進事業により教員間で何度も交流する中で、小・中・高それぞれの教育の違いについて理解でき、各学校の教科指導に役立てることができた。

○　リンク先

http://www.kagawa-edu.jp/takouh01/index.htm

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　高知県
推進地域名　　中村市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
・児童、生徒に対する「総合的な学習の時間」における的確な支援について
・農業高校の施設・設備並びに教育力を利用した各小・中学校への支援について
・農業高校が小・中学校の学習を理解することで、より密着した学習の在り方について

○連携推進地域協議会の活動状況
・年間計画の作成と連携、支援の在り方
・専門高校による小・中学校の「総合的な学習の時間」についての支援の在り方
・保護者や地域での支援の在り方
・食農教育についての協議

○推進校における活動の実施状況等
・飼育、栽培、食への興味や関心が高まってきた。
・学級園で栽培することで、収穫にむけて継続した活動ができた。
・高校生、高校が身近なものとなり、進路学習にもつながった。
・生徒の地域理解が深まり、地域との連携もすすんだ。
・生産、収穫、加工、販売という一連の流れを体験できた。
・推進校以外にも連携の輪が広がった。

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策
・実施時期や内容についての計画段階での綿密な調整
・小・中学校の児童生徒の学習内容を考慮した支援内容
・児童生徒の自主的な取り組みへの発展

○２年間の研究の全体的な評価
・小・中学校の「総合的な学習の時間」の有効な活用ができた。
・高校生が指導者として参加することによる生徒自身の成長
・専門高校と小・中学校のより密接かつスムーズな連携
・専門高校のもつ知識、技術、教育力が学校や地域にむけて発信された。
・児童生徒の地域理解が深まり、地域の方との連携も密になった。

○　リンク先
高知県立幡多農業高等学校　　http//:www.kochinet.ed.jp/hatanogyo-h/
中村市立東山小学校　　http//:www.kochinet.ed.jp/higashiyama-e/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　　報告書の概要

都道府県名　佐賀県
推進地域名　大和町

○研究テーマ
　農業体験を通して専門高校と小･中学校とが連携することによる専門教育の推進と活性化を図る。

・重点目標
　推進校　高校生が小・中学生に農業を指導することにより、農業教育の魅力を自らが再発見し、学習の方法や学習姿勢を見直す機会とする。また、本事業の成果を小・中学生を通して地域へＰＲすることにより、農業高校への理解を促進する。

　連携校　高校生が指導する農業体験活動を通して、農業の素晴らしさを楽しみながら知るとともに、学習への興味・関心を高める。また、小・中学生及び保護者に専門(農業)高校への理解を深めさせる。

○連携推進地域協議会の活動状況
　専門高校と小・中学校の連携を綿密にし、小・中学生にとって有効な学習となるように、学校間の実務担当者会等を計10回開催した。また、推進校の高志館高校では、すべての学科の生徒が、本事業に関われるように心掛けた。
　連携推進地域協議会では、連携事業に参加できない委員が本事業の成果を的確に判断できるよう、各授業や実習の風景をビデオに撮影したり、小・中学生や高校生及び小・中学生の保護者に対してアンケート調査を実施した。

○推進校における活動の実施状況等
・高校生は出前講座で小・中学生の興味・関心を高める指導はどのようにすべきであるかを検討して取り組んだ。
・１年目の事業の課題(栽培方法など)を２年目は、克服できるように工夫がみられた。
・花壇作りの作業において、予定までの作業が終わらなかったので、次回の作業に向け高校生が、放課後毎日中学校を訪れ、作業を継続し、次回の作業予定に合わせた。
・事業終了後も、高校生が中学校につくったモニュメントや花壇のようすを見に行くなど、中学校や小学校との交流が続いている。

○今後の課題として残ったこと及びその対策
・本事業に関わったすべての学校の生徒や教師に高い評価であり、可能な限り継続を求める意見も多かったが、本成果に対して他機関からの協力の申し出の可能性がでてきた。

○２年間の研究の全体的な評価
・本事業を多く小・中学校の保護者が子供たちから聞いており、授業自身を参観したいという意見もあり、小・中学生の保護者が専門高校(高志館高校)に対して好印象を与えた。
・専門高校の学科によって割合は異なるが、本事業により、高校生の授業に取り組む姿勢が変わり、学習意欲を喚起する機会となった。
・高校生は「食と環境」に直結した農業を学ぶことに自信を持ち、小･中学生は農業の楽しさを体験した。

○　リンク先
http://www.saga-ed.go.jp/school/edg10022/index.htm

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　　報告の概要

都道府県名　長　　崎　　県
推進地区名　鹿　　町　　町

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

①専門高校での体験学習が、小・中学生の生きる力の育成に有効であることを研究する。
②小・中学生を指導することが、高校生の生きる力の育成に有効であることを研究する。

○推進地区協議会の活動状況

①第１回（平成１３年９月１２日）
ア　本事業の全体説明　　イ　全国連絡協議会の報告　　ウ　推進校における事業計画
エ　実施上の諸課題
②第２回（平成１４年２月２７日）
ア　本年度の実施状況　　イ　中間報告の作成　　ウ　事業実施上の諸課題
エ　次年度の実施計画
③第３回（平成１４年８月２日）
ア　本事業の趣旨説明　　イ　推進校における平成１４年度事業計画　　ウ　実施上の諸問題
④第４回（平成１５年１月２９日）
ア　本年度の実施状況　　イ　事業の評価　　ウ　報告書作成について

○推進校における活動の実施状況

①小学校４学年理科「電池のはたらき」（作ってみよう）電池で動くおもちゃを自作させ、そのおもちゃで活動する中で光電池のはたらきへの理解を深める。（平成１３，１４年度）
②小学校５学年家庭科（気持ちのよい住まい方「住まいの汚れと掃除」に関連し、掃除をした排水は、環境にどんな影響を与えるか。（１３年度）
小学校５学年総合的学習の時間「田の水」での水質検査（１４年度）
③小学校５学年総合的学習の時間「ホームページを作ろう」（コンピュータの基本的な操作を学習したことを活かしてホームページ作りに挑戦しよりコンピュータに慣れ親しむ。（平成１３年度）
④小学校４～６年生のクラブ活動の時間にコンピュータクラブ，ソーイング・クッキングクラブ，スポーツクラブが交流を行い指導をうけた。

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

①研究期間だけの連携で終わらず、継続した連携事業を進めるための模索
②生徒間の交流だけでなく、教師間の交流や地域を巻き込んだ幅広い交友の模索
③地元に根ざした工業高校、開かれた工業高校としての活動はどうあるべきか。

○２年間の研究の全体的評価

①ものづくりを完成させ目的を達成させることにより、「生きる喜び」、「生きる力」が育成されるということが実証できた。
②地元新聞に全企画が紹介され、広く地域の人々に専門高校を知ってもらうことができた。また、学校の施設を開放し、専門高校の姿を知ってもらうよい機会であった。
③夏休みを利用した教員の技術研修を実施することにより，教員間の壁がとれて校種は異なるが同じ土俵で話せるようになり，連携がよりスムーズに行えるようになった。

○　リンク先
http://www.academic1.plala.or.jp/shikakou/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告の概要

都道府県名　長崎県
推進地域名　田平町

１　研究テーマ及び研究においての特に重点を置いたところ

① 作物・動物・加工等における栽培・飼育・食品製造に関する体験をすることにより，栽培、飼育管　理の大切さと勤労性・収穫の喜びを味わう。
② 介護福祉の「車椅子体験」をとおして高齢化社会に向けて介護の必要性を知る。
③ 専門高校生が中学生の指導をすることにより，生徒自身の学習意欲が高まる。
④ 専門高校生と中学生との連携し，相互の理解と信頼が深まる。

２ 連携推進地域協議会の活動状況

（平成１３年度）

① 推進校による実施内容・計画の検討会 ・実施期日と実施内容について	平成１３年５月
② 専門高校と中学校との連絡会議 ・実施学年・実施時期・実施方法	平成１３年６月
③ 連携推進事業における地域推進協議会 ・推進委員と活動内容について	平成１３年９月
④ 連携推進事業の地域推進協議会 ・１３年度を終えての反省と次年度の計画について	平成１４年２月

（平成１４年度）

① 専門高等学校及び中学校との年間計画について	平成１４年４月
② 推進事業の実施計画についての協議会	平成１４年５月
③ 推進校間の実施に向けての準備及び検討会	平成１４年７月
④ 中学校における検討会	平成１４年９月
⑤ 地域推進協議会	平成１５年１月
⑥ 中・高校と連携の成果とまとめについての協議会	平成１５年２月

３ 推進校における活動の実施状況

① 中学生が農業高校に設置する学科の内容を体験学習することにより，生命・自然を大切にする心を養うことが出来た。
② 作物・動物・加工等における栽培・飼育・食品製造等の体験により，勤労性と収穫・手作りの喜びを味わうことが出来た。
③ 専門高校生は学ぶ側から教える側となり，生徒自身，学習意欲が高まった。
④ 中学生との交流ができ，相互の信頼を深めることができた。

４ 今後の課題として残ったこと及びその対応策

（１）今後の課題
① 実施時期・時間・場所・人数等の配分に充分な打ち合わせが必要
② 実施内容の時期的なものについては変更時の予備設定も必要

（２）２年間の研究の全体的な評価
① 専門高等学校（農業）と中学校との連携により，高校生と中学生との交流ができ、今までにない活き活きした学習ができた。
② 推進校の生徒も，今までの学ぶ側から教える立場になり「教えて学ぶ」という姿勢により学習意欲が高まった。
③「車椅子」体験によって，介護福祉についての心得などを学ぶことができた。
④ 推進先の中学生も，農業高校の状況や学習内容を知り，農業高校への関心が高まった。

○　リンク先

http://www.isahaya-cc.acjp/~wombat

平成13・14年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　福 岡 県
推進地域名　津屋崎町

○ 研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

この地域の小・中学生が海や水産高校を使って、自然や生命と触れ合う学習に取り組めるように、また、専門的な学習を体験できるように工夫する。また、水産高校の生徒にとっては、教えることによって得られる「苦労」や「喜び」を体験することができる貴重な学習の場となるはずである。

さらに、この連携事業が地域内各学校の交流を深め、「総合的な学習の時間」の教育効果を高めることも補助的なねらいとする。

○ 連携推進地域協議会の活動状況等

地域内の各学校は距離が近く、連絡が取り易い事もあり、事業前の連絡は高校側から小・中学校を回って打ち合わせをするというパターンで準備が進んだ。この方法は正式な会議形式ではないものの、機動力に優れていたが、連携各校の担任レベルまでの完全な意思疎通という面では、少々細やかさにかける準備体制だった。

○ 推進校における活動の実施状況等

水産高校と小学校は、これまでもクルマエビの放流や地引網見学等で交流の実績があったが、いずれも単発的なものであり、高校生が主体的に指導したり、小学生と高校生が力を合わせて網を引いたりという深い連携ではなかった。今回の連携でこれまでの交流がさらに深まったということができる。また、連携内容についても水産高校の全ての学科が力を合わせて取り組む体制を構築できたことが大きな成果だった。

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

今後、連携事業を継続するのであれば、事業内容を精選し、年間指導計画との連動を図る等、計画性を持って準備し、じっくりと事業に取り組むことが必要と思われる。

○　2年間の研究の全体的な評価

水産高校にとっては、この連携事業に1年生から3年生まで、学校全体で取り組めたことは大きな成果だった。教える側の高校生が熱心に、そして親切に小･中学生に接する姿勢は、高校側にとって予想以上の収穫であり、これまでのどちらかと言えば゛受動的゛な各科実習に比べ、より大きな教育効果を上げることができた。

また､小学生･中学生にとっては高校や高校生と身近に触れ合うことができた貴重な体験となり、お兄さんお姉さんへの感謝の言葉が印象的だった。

○　リンク先

http://www1.ocn.ne.jp/~suisan-h/

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　熊　本　県

推進地域名　　芦　北　町

○研究テーマ及び研究において特に重点をおいたところ

・小・中学生に本校での農林業体験実習を通じて、農業科や林業科の教育内容を知らせる。

・小・中学生に農林業の生産の喜び、楽しさを味わってもらい、ものづくりや環境問題への興味・関心を高めさせる。

・高校生が小・中学生を指導することによって、自分自身の学習意欲を高めさせる。

・連携の推進体制のあり方を研究する。

○連携推進地域協議会の活動状況等

・平成１３年９月２５日　第１回連携推進地域協議会　10：00～12：00

会場　　芦北高等学校　　出席者　　構成員１２名のうち代理を含め全員出席

協議内容　・実施要項及び協議会設置要綱について

・事業実施計画及び事業実施について

・平成１４年１月２８日　第２回連携推進地域協議会　10：00～11：30

会場　　芦北高等学校　　出席者　構成員１２名のうち代理を含め１１名出席

協議内容　・各推進校の取組状況について

・次年度の事業実施計画について

・平成１４年６月１１日　第１回連携推進地域協議会　10：00～12：30

会場　　芦北高等学校　　出席者　構成員１３名のうち１２名出席

協議内容　・各推進校の取組状況について

・全国連絡協議会報告

・今年度の事業について

・平成１５年１月３０日　第２回連携推進地域協議会　10：00～12：30

会場　　芦北高等学校　　出席者　構成員１３名出席

協議内容　・各推進校の取組状況について

・本事業の成果と課題について

○推進校における活動の実施状況等

・平成１３年度

芦北高校と佐敷小学校　甘夏ミカン収穫体験実習(農業科)、林業についての学習(林業科)

芦北高校と佐敷中学校　マーマレード製造実習(農業科)、植林海外ボランティア体験、環境学習（林業科）

・平成１４年度

芦北高校と佐敷小学校　サツマイモの収穫実習、花苗の鉢上げ、ミカン収穫実習(農業科)昆虫探し、どんぐりを育て森を育てる、森と水・森の役割(林業科)

芦北高校と佐敷中学校　春夏花壇の植栽、サツマイモの栽培と収穫マーマレード製造実習(農業科)、植林体験（林業科）

・平成１３年度に５回、１４年度に１３回、芦北高校や佐敷小学校、佐敷中学校へ出前授業を実施した。

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

・今後とも連携事業を推進するためには、校務分掌に担当窓口を設置する。

・事前の打ち合わせを早めに行い、事前準備、事前指導にゆとりを持つ。

・事業の内容によっては土・日の活用を含め、地域とのネットワークづくり、関係機関との連携を図る。

○２年間の研究の全体的な評価

・小中学生の農林業に対する理解が深まり、ものづくりや環境問題にもこれまで以上に関心を持つきっかけになるとともに、芦北高校への理解、親しみが増した。

・連携事業の体験学習で本校農業科、林業科の理解が深まり、そのことによって本校志願者が増加した。

・小中学校の先生方の評価として、本校生徒の力量で本事業が推進できたことで、今後とも継続的に実施したいという意向が強く出てきた。。

・高校生にとって、教える立場に立ったことで、学習成果に対する自信が出てきた。それとともに、中学生が目的意識を持って実習する高校生に刺激を受けた。

・小中学生が生産の喜びを感動を持って味わう機会となった。

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　大　分　県
推進地域名　日　田　市

○研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

①テーマ　　「地域の子供たちとともに学ぶ専門高校をめざして」

②特に重点を置いたところ

ア　林業学習やものづくりを通して、自然、資源を大切にする心をはぐくみ、ものづくりの楽しさを伝えるとともに、専門高校への興味・関心を持たせ進路決定の参考になるように配慮する。また、専門高校の生徒自身が小・中学生を指導することにより、自己を理解し、学習意欲を高めるように配慮した。

イ　平成１３年度は農業科中心の取組であったが、平成１４年度は学校全体の取組とし、各学科の教育内容を生かした実践的な活動を行うことにより、学校全体の活性化を図った。

ウ　推進校との定期的な連絡会を行うように改善するとともに、本事業終了後も継続できる体制を作る。

○連携推進地域協議会の活動状況

平成１３年度の推進協議会の取組を踏まえ、平成１４年度は、第１回推進協議会で委員が実際の連携活動を参観することを取り入れたので、活動内容や取組状況が具体的にわかり事業計画や連携方法等の工夫改善に生かすことができた。また、第２回推進協議会では、県内の専門高校と地域の小・中学校からの参加者を交えて報告会を行った。その中で連携の意義や必要性が確認でき、各学校や地域の実態に応じた連携の在り方の参考となった。

平成１４年６月１４日（金）：第１回連携推進協議会開催

①全国連絡協議会の報告及び、本年度の連携推進事業の実施計画の説明をする。

②専門高校と小学校の連携授業の参観、意見交換及び、本年度の取組の協議をする。

平成１５年１月１５日（水）：第２回連携推進協議会及び実践報告会の開催

①平成１３・１４年度の連携推進事業の概要報告、平成１４年度の連携推進校実践報告及び、意見交換を行う。

②今後の連携推進の在り方について協議をし、事業全体の指導講評を受ける。

○推進校における活動の実施状況等

平成１３年度は農業科中心の取組であったが、平成１４年度は学校全体の取組とした。

活動内容	平成１３年度	平成１４年度
	・森林教室 ・出張講義 ・パソコン教室	・森林教室　・資源の再利用　・木工教室　・出張講義 ・機械工作実習・メダカ飼育池作り・ホームページの作成 ・マイコンカーのしくみ　・伝統文化についての研究

○今後の課題として残ったこと及びその対応方策

児童・生徒が移動する場合の交通機関及び安全の確保、学習指導、学習上の安全指導、時間数の確保及び経費の課題がある。そのため、移動では事前の交通安全教育や交通指導、学習活動では事前学習と安全指導の徹底、活動内容の研究や教育課程の工夫等、並びにインターネットやＴＶ会議システムの利用が考えられる。

○２年間の研究の全体的な評価

連携の実践や「連携推進地域協議会」を通してお互いの連携が深まり、校種間の違いを越えて地域全体で取り組む気運が高まるとともに、専門高校への理解につながった。

高校生は、専門の学習内容を生かすことができ、学習の深化と自己理解につながり、小・中学生では、ものづくりの楽しさや、大切さを知るとともに、専門高校への進路意識の高揚につながった。また、推進校以外の小学校から連携事業の申し出があるなど、本事業の意義が地域へ広がり、専門高校への理解を促した。

○　リンク先

http://hitarinkou-h.oit.ed.jp

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　鹿児島県
推進地域名　加治木町

○　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ
・　小・中学生が工業高校の学習状況を見学することにより，工業高校の理解や将来の進路選択に役立たせる。
・　ものづくり体験や交流授業を行うことにより，ものづくりの楽しさや喜びを体験させ，ものづくりに対する興味・関心を高める。
・　体験入学や交流授業で，高校生が習得した知識や技術を小・中学生に教えることで，異年齢間の心の交流を図り，ものものづくり学習を再認識させ，専門高校の活性化を図る。

○　連携推進地域協議会の活動状況
・小・中・高連携推進事業体制の確立
・小・中・高連携推進事業実施計画の作成
・ものづくり体験学習の計画・準備
・ものづくり授業見学の実施
・ものづくり体験学習の実施
・ものづくり交流授業の計画・準備
・ものづくり交流学習の実施

○　推進校における活動の実施状況等
・ものづくり授業見学
・小・中学生へのものづくり体験学習
・小学生とのものづくり交流授業
・中学生とのものづくり交流授業

○　今後の課題として残ったこと及びその対応方策
（１）今後の課題
・　ものづくり学習は，児童生徒に興味・関心を高める学習としてその効果が大きいことから，今後もこの事業の継続が望まれる。
・　体験学習や交流授業で，高校生が中心となって指導をしたことは，小・中学生に好評であった。今後，高校生が計画・準備を行うことによって自分達の専門学習を再認識し，専門高校の活性化に繋がるものと思う。
・　交流授業等については，開かれた学校づくりの一環として，地域社会との交流に発展させられる。今後，産業社会の一般技能者と高校生との交流授業の計画を検討したい。
（２）対応方策
・　小・中・高校間で話し合いを持ち，年次計画で年間行事に組み込むことでこの事業の継続が可能である。
・　体験学習，交流授業の諸計画・準備を高校生に行わせることは，高校生を教師が指導することで，また，小・中・高連携を課題研究の一テーマとして設定させることが考えられる。

○　２年間の研究の全体的な評価
・　体験学習・物づくり交流授業をとおして，小・中学生，小・中学校の教員や，地域社会が専門高校生や専門高校への認識が変わり，理解が深まった。
・　交流授業は，小・中・高校生ともに，ものを作る楽しさや完成の喜び等を体験することによって，ものづくりへの興味・関心が高まった。今後もものづくりを中心とした事業を継続・充実させていく必要がある。
・　高校生が小・中学生にものづくりを教えることにより，人に教えることの難しさと自己の技能レベルを知り，自己の研鑽に自発的に努力した。また，自分たちの学習内容の確認も行うことができ，専門高校の活性化に役だった。

○　リンク先
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Kajiki-T/top.thml

平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業　報告書の概要

都道府県名　　沖縄県

推進地域名　　名護市

１　研究テーマ及び研究において特に重点を置いたところ

「感性豊かな児童・生徒の育成」

ア生産活動をとおして創造性豊かな児童・生徒を育成する。

イ勤労体験学習をとおして、働く喜びと協同・協調の精神を培う。

ウ農業にふれ、農業の意義と役割を理解し自然を尊ぶ心を養う。

２　連携推進地域協議会の活動状況

(１)第１回専門高校と小・中学校との連携推進地域協議会（H13.9.19教育庁）

ア専門高校と小・中学校との連携推進地域協議会委員委嘱状交付

イ専門高校と小・中学校との連携推進地域協議会設置要項承認

ウ平成１３・１４年度専門高校と小・中学校との連携推進事業実施計画承認

エ実務的な連絡調整のための連絡協議会（連絡会）の設置承認

(２)第２回専門高校と小・中学校との連携推進地域協議会(H15.1.9北農)

ア連携推進事業の反省及び評価

イ今後の連携の在り方

３　推進校における活動の実施状況等

・黒糖づくり体験学習・・・・７回

・園芸体験学習等・・・・・・２回

・石けんづくり・・・・・・・３回

・ケーキづくり体験学習・・・４回

・動物とのふれあい体験・・・１回

・ジャガイモの栽培学習・・・１回

・その他(連携校以外)・・・・１０回

４　今後の課題として残ったこと及びその対応方策

課　題	対応方策
・連携事業の継続(小・中)	・可能なかぎり継続する。ただし、事前に調整が必要（北農）
・体験をとおして何が得られたのか、次の目標は何かを明確にする。	・１事業毎に成果を検証(反省・評価)し、次の目標を設定する。 ・連携校間で定期的に連絡会を持つ。
・学校間の連絡調整を密にする。	・北農(農場長)を中心に連絡調整する。

５　２年間の研究の全体的な評価

・子どもたちの生産意欲・農業への関心が高まった。

・生徒自ら教材を準備するなど自主性が醸成された。

・「総合的な学習の時間」の学習展開に合致した事業であった。

・連携校にとって相乗効果があり、多くの面で有益な事業であった。

・連携校間や地域との連携が深まった。